

嬉遊笑覽

遊戲之部
附手向

廿一之三

和
第三卷
共十八

庫	文	政	大
一	七	和	
八	四	書	
七	六	門	
九	五		
冊	函		

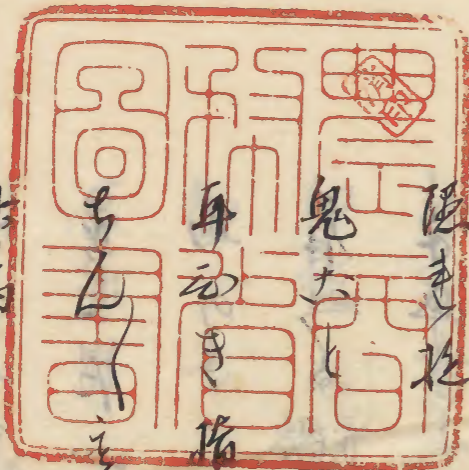
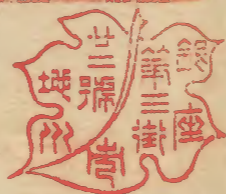
庫	文	閣	內
一	七	和	
八	四	書	
冊	六		
架	五	類	

內閣文庫	
番號	和 7465
冊數	18 (11)
函號	184 1





嬉遊笑覽卷之廿一 目錄
 兒戲
 觀好
 類
 眼



非馬

極車

極車

り

が甲

しんが

い

うぶ
 十四ノウ

十三ノウ

十一ノウ

十一ノウ

十ノウ

九ノウ

五ノウ

五ノウ

一ノウ

目々々

廿ノ才

耳引うけ

廿ノウ

かあう

廿一ノ才

まことふま

廿一ノウ

馬のう

廿二ノ才

肩うう

廿三ノウ

手車

廿四ノ才

道中巻

廿五ノ才

うねきけい

廿六ノウ

鬼の苗う

廿六ノウ

目白おー

廿七ノ才

つひを

廿八ノ才

豆込

廿九ノウ

何ん

卅ノ才

印提

卅二ノ才

飾う

卅九ノウ

葛蒲

四十二ノ才

刺り

四十五ノ才

小児

四十九ノ才

ねり板

五十一ノ才

戸の皇子いゝと帝ふくはりし時衣冠のふくは
きしれりすと我太子傳記よりん海を又曰天
王給人櫻中邑河こりふ津よりに橋の井、渡り
きよ添乳うた祐し法原小がりしや祐直死
らゆらこまらに聖徳太子の幼稚の時月指日
が子より歌傳し今に云ふや祐らとあ歌ふま
ことに歌云新詠ゆき子あり歌の終よたよ多
かふくや又子より歌は七里の溪の砂に教り
たふま井卜養落發平のりうき時さ秋のま
がしゆふしむの子よりがは、あぶしはさよは

まの海さふの教はとよいや松の葉裏紐傳本よ
七里おまの砂にうたふとおもいともこり
○ていゝ又たいゝきり續山井條つじたい
くまやまのまのま杉杉次藤と童とせり杉
古くハ小児なりて物と乞ふるよの月ひ
初より狂言記山たふていとおこさぬ、同統集
よこの又太子集よ貞徳秋の夕れ歌の志んまは
初ありよていとおさぬ又とあ漢ま、醒睡笑
也思のちと外原堂宗の者あやまらて言記処よ
り落さぬよ念仏心ひりまはいたのる人の云

ツキ下云一分ラ又故サカニラニアフ下改又
ニナリ流徒然草を詠知れぬ大と作かそは
ん分りまじら智者と云川ちや子持やうつ
の葉とつ子供のワもくし也有邪安う狂奇も是
外中もさるし吾詠我葉山辰もが奥まうたうにか
うきんがう路ともんめたつ子にぬほと嶺山井
洞見もはんよかニれんがうしは一首かうれど
まらう系うけけ見さるう 次長小橋もせよや所
まふかをれんか守昌あともえたけ物類祿呼か
うきんが出雲よておうれしごお抱ゆううそは

うしをや 謙倉うてかか へきんが仙居しん
そはしううと云 世茂も一極めに鬼と影時者
決定むる事祈うを付しふ云 江戸もうかかろ電
ん分りにどよめよむこのうさ法そはんがうと
まうやまうち一法んのみきや也 又法んく切ちめ
ちやむちやが名よとゆい 玉持辰内よりか
先教んううの互よ奉と極うかしそ是法詠よちか
へう如くよしよふかニれがちたうやふけり先ち
うちんとはしきままのめおちたのけ又同ぎ
り志よたきうおけたのけ こと知いし又江戸は
てのいちくたちく三のけ こと知いし又江戸は
帰よ親電の傳う格り進い 腕千番甲七次弟ヲ
いちくたちく毛たうけ 腕千番甲七次弟ヲ
定ムルニ草履ヲカタカタ腕ヲコレヲ刀ツメ空

三向ヒテ一度ニ投ケ馬カ牛カト云其伏仰ヲ不
フシタトハ象棋ノ金カ歩カトイヒ基ノ調カ
半カトテスル丁ノコトニ彼チヤ子持も六の
一極めしソふる事多クハ一了し旅持も一
流土よハこの哉と捉迷藏もソハ御濃祀よ玄宗
揚妃とこの哉といたるトハ此社此社ハ異
るゾ森ハコシ又草履ハソハありハつても志
かたよそ一人尋る者ハ中りテ教ハ徳とハ物持
求め出さしむ尋る者ハ鬼也ソハ以テ二年川柳
真智白「秘のうらささうか」ハソハ廊下でハ
の妓女

とハ

鬼ごと

物敷祓咩江戸も鬼多ク京もつく海一が
大坂もてむハ一が東國及出雲也又肥の長治よ
て鬼ごとハソハ奥の仙臺もて鬼ハ津路もてお
くハご常陸もて鬼のまもてハソハ存子也とら
子と病ニソハ鬼とハ和女天川辨哉天の宗式よ
行りともむとの原ハ三國傳記ハ悪心僧都岡羅
天子故志王経とてそ心持とハ童と集め地蔵
比叡卒也取むとハ社ハ此社ハ此社ハ此社ハ此

ちしくもしづかしの葉 三
ら踊とつ小分竹 是れ
こといつて ○後撰集 曲集い
り云くもたひつさる北
竹馬

古の竹馬の葉の習をる 生市は奇づ古画よこ
えたり又後撰草子に童子の持たる二本にし
て其の製よ近く但し市よそへ傳りたる物とこの
江吏部集よ七歳初讀書騎竹擊紫泉九歳始言詩
拳花殿霞所古分よ市言はれは秋のたのむら
るまよのあまひとあまひ出つ
集よ運谷る

市言や秋よ竹馬の友人從斎が書るまの友
おのまも難考の中よ我つ竹馬はれは秋のたのむら
およの果きていよ竹馬の醜醜は生よ君
生殿作り 新木作刀紙作旗揚り 竹馬若鞭騎
童安習陣新亦安中不忘危まよ古き御禮登りよ
市言よ系り小篠の藝む山嶺山升上り
篠のこ音の竹馬如貞 松江重頼懐子月集と撰
万法三年卒業と若市のはまやこれ懐子はあ
まの竹馬下し 田楽の踏足一歩折り又行人の
竹馬のいよの言足駄なり
古くは録すて言の是
如くは
十三

あ保元物語為義ノ罪名定ムル処長徳ノ比花山
法皇紅ノ袴ヲ以キノヘサセテ奉リ高アヒニ又
サレ築垣ニ御腰ヲ懸サセ給ヒヨナク御遊事ヲ
アリレヲトアリ按スルニ此ハケ物ノマ子遊バ
サレト云フハコノニ門御画ヲヨクアリハサ
レテヤウノサマウツサセ玉ヒエヨシ大カバニ
ニ見エタルヲカ誤リツタヘタルナルヘシ○
高足ハ洛陽田樂記ニ高足一足ナトイヒ又古事
談永長大田樂ニ一足トアリテ其下ニ又高足ト
ナルニテモ高アヒハ二本ナルヲ知ヘニ前ノ田

樂ノ條ニアレバ合セニヘシ○列子ニ以双枝長
倍其身屬其經並趨並馳弄七劍迭而躍之五劍常
在空中云々口義云雙枝屬於經今人所為接脚之
戲是也○因樹屋書影云双枝屬足即今端高踏之
戲習于著履寸々而上長倍身矣亦能弄刀劍等○
又馬貝の戲ハ是と或陽々々所傳ニトヨク志ハリ
一始ハ九代ハ市村好も本門明和二年乙酉の訖
是と云々志ハリ々始ハリ々々々々々々々々々々
ハ古くヨリハリ々々々々々々々々々々々々々々
痛傷除^シハリ々々々々々々々々々々々々々々々々

戲若杜民函求子所謂兒年五歲為鳩車之樂七歲
為竹馬之歡者是也トイヘリ

魚うのこごい いんぢい いぶ先 いんぢ いんぢ

魚うのこごい 大鏡五卷苑山院所伝の玉匣中も此あ
て水鳥のつづいたまゝさめけりありうたう
んねの皮を男のをよびよのまゝ光りしを
うちぢかおどさばはあめて巾、あゝおが
すゝかゝとありめういひの目眩うもや今りふ
魚うのこごい 魚うのこごい 魚うのこごい 魚うのこごい 魚うのこごい

き如といざけりまきば目赤うれ訛うともい
ふつたれと非へ後世ハ物ヲ請フヲ否ト云ニ目
ノ皮ヲ指ニテ引テヘカトモヘイ氏イフサレド
コレモ近時ヨリノ丁ニモアラズ半井ト養落髪
千句クシモセス花一枝ヲ所望ニテノソイテミ
レバベイカ紅蓋是クシモセズベカ、ウニタル
こ正三及人の因果物語よ三町の旦那づう犬を
つまゝ申控うとけり魚うのこごい 魚うのこごい 魚うのこごい
うゝん魚うのこごいに目の赤きなるを いんぢ いんぢ 見聞集の跋
よ或時と歌とありめうめうめうめうめうめうめう

向やまば又露身よりふ茶子に小兒の啼と止る
時むらこのりの鬼があるといふに後宇多院
弘安四年北條時宗、桃槍のり元元の世祖セメ
ある元ハ蒙古新まの鬼、このハ夷賊と云ふ
蒙古國裏よりふまのりハ謀りこ^{箱庭云}ハ高分
藤井二賊と^{りふ}ハ吾時我集ハ鬼づるこ^りハ成小
こ^るハひくまの皮をむら^りハせこ^りハ牙と成小
け^んを志^す、然てか^らハせりふハ大和國元奥寺
此鬼の本奉^りた^り辨^り見^るこ^りハ又^も知^るこ^りハ魚^也
何て^るこ^り甲^とり^ひハ小兒と^いふと^も成^るも^あり^予
が^知き^時乳^母ど^もが^姑獲^智が^ある^こり^ハ一^は身

に^いて^恐ろ^しき^おま^りこ^りハ^さり^行風^が
古今書曲集の序玉佐の年^ハ甲^大和^の元^奥寺^と
い^はる^さて^うま^りの^まり^甲ハ^即ち^境の^めり^ハ
う^れる^まる^露身^子ハ^多分^ハこ^りハ^敵ハ^あて^るあ^る
ゆ^て志^すハ^又玉^佐と^りひ^ハ彼^知ハ^元奥^寺乃^如
き^古事^のり^まあ^るハ^唯進^部の^國に^北ハ^鬼あ
る^やに^りひ^傳ハ^移る^んあ^りま^目ハ^残を
る^まハ^あま^ハ福^元奥^とり^ひハ^甲と^書ハ^見往^今
あ^てる^まハ^福元^奥ハ^甲と^書ハ^見往^今
も^玉佐^國の^小兒^ハ甲^とり^ひハ^玉佐^とり^ひ
く^遠つ^るこ^りハ^おま^りこ^りハ^ある^こり^ハ小^兒集^り

互よ事代らゝ命を事代甲武互よ事代らゝ白ひ
河系でかゝりけ焼ハ五皿六皿七皿八皿ハ皿ハ
小おらむゝづんづつゝこれト鬼よこれ
ト鬼よ甚るゝ蓋きてあるものカ鬼よ此これ
をひひけゝ事代甲を事代らゝの終よあゝる者を
鬼よ定むこれいけゝにゝもゝる鬼定めし思フ
ニ皿カヅへノ化モノハ諺ハ是ヲヨリ出タルカ
諸國里人談ニ世ニ知トコロノ皿屋鋪ノ丁ヲイ
ヒテ其古井ノ跡糺町ノ内ニアリ又雲州ニモ播
州ニモアリ何レ一処真ナル処アラント云リ今

モ番町サヲヤニキトイへルハ播州トマカヒ易
ニ必誤リアル丁ニルニ本ヨリサヲヤニキハ家
居モナキサヲ地ノ屋敷ヲ云々コトハ附會ニテ
皿ヲ破リニ女ノ怪談ヲ設ニナルへニ因ニ云コ
レトハウラウヘノ物カタリニテ然モ寔録ナル
へニ加藤左馬及嘉明南京焼ノ皿十枚秘藏ナリ
ニヲ近ク召仕リモノ取落シテ破リケレハ恐レ
テコモリ居ル由ヲ聞テ呼出ニアヤマチハ誰モ
アルモノニ苦ニカラズ破レ残りタル皿ヲ持来
レトテ自ラ悉ク打破此皿残りタラニハ何ノ

年何某カ破リニト其者ノ名ヲイハニトヨカラ
ズ我毛頭怒リテカクスルニ非ズトテ其後ハ器
物ヲ愛セラレズトカヤ後撰夷曲集薈弁ノマメ
ナヤウニト各付子ハソレヨリ鬼ヲカナボウシ
ナレハニ州池多ク甲ハ名めニトテ其実ヲ失
得ル多ク甲の如くせめれどもさよあはれは
てんううとくつくしんううハ年葉ワサあり
得ててんぐうとくしんうう松の葉永閑ぶす
んくすつ一休よりしらひあはれんがうと
けり又おりく乞ふ張香とてうらがおぬもは

うけりてんぐうとくしんうう續山井寛又七折る人より
わくしんううとくしんうう友釋此句上より
うけりてんぐうとくしんうう又後撰夷曲集薈弁ノマメ
北ぬのえりてんぐうとくしんうう紅梅友
次ツギ云籠耳草子れ姑獲鳥のそ和名抄より孕婦を
ウブメと訓も産婦の義も今昔物語より生児を抱
きて人を詭つてんぐうとくしんううとくしんうう
本草綱目云姑獲鳥産婦所化陰慝為妖とけり本
草啓蒙より一名釣星鬼外臺夜遊鳥潜確中國めて
かうぬめとけりてんぐうとくしんううの夜中抱りてんぐうとくしんうう小児を害也

と云く夜中の小児を知らず出さば世帯の噂見
の啼く如く小児を知らず出さば世帯の噂見
沈舟小児の衣服を夜中邪に於て乳を吐き禁
と云く小児を知らず出さば世帯の噂見
籠耳ニ形襲ニ似たり
出テ鳴ト不ヘリ
作故胸前有兩乳喜取人子養為已子凡有小兒家
不可夜露衣物此鳥夜飛以血點之為誌見輒病驚
及疳疾謂之無辜疳也荊州多有之亦謂之鬼鳥周
礼庭氏以救之日之弓救月之矢射鬼鳥而此也これ
その小説と出所は
和名抄に罽鼠を毛美と訓は是れ又ムサハ
ト又モ、かき小倉これ日本沖唇帯トモ、土州

モテ同州ソバヲニキ西國ノフスマ畿内バニド
リ。又レテ飛州城妙山中ハ彦ガ他國海山
ハ多ク古分ハ春日山高田山揚州の三國山等
と云く小児を知らず出さば世帯の噂見
福色右尾身ハ長ハ腹下黄色喙領黒白色四脚
肉翅尾ハ連ハ翅と同クは傘張ク如ク是ハ
本指ハ穴居ハ夜出ハ能ク然モ共只言キハ好
ト云く小児を知らず出さば世帯の噂見
ふハ物ハ百歳ハ老父ト云キハ又ハ志
ト云く小児を知らず出さば世帯の噂見
十九

ふふ北戸録ニ陳藏器引五行書除午厄埋之戸内
やふ北戸録ニ陳藏器引五行書除午厄埋之戸内
恐爲此鳥所得其備鷓鴣始護鬼車編備類也嶺表
录異ニモコノ説アリモ草瓜ヲトルナモコノ故
ナリ世説故事苑ニ七種ヲ槌事事文类聚ニ歳時
記ヲ引テ云正月七日多鬼車鳥度家々槌門打戸
滅燈燭襪之和俗七種菜ヲ打ツ唱ニ唐土鳥日本
ノ鳥渡ラス先ニト云ルハ此鬼車鳥ヲ忌意ナリ
板ヲ打鳴スハ鬼車鳥不止ヤウニ襪也星四名ヲ
天鳥ヲ逐フ事ハ周礼秋官ニ見エタリ桐火桶ト
云モノニ正月七日七草ヲタ、クニ七ツハ七度

四十九タ、クニ七草ハ七星ナリナトイヘルモ
周礼ニ本ツケルナルヘシ

目々々々

長門本平家物語 卷九 清盛愛之體験をみる処
と一ハ人の目々々々をみるやうにたうひよ海
下、此もよ浪もよせめりまつらぬるる太平
記 卷十 箱根竹下合戦の条、やうに目々々々
て蘆倉よ集り居るハ、あふまらぬ異制庭訓
よ遊戯を挙ぐる処目々々々頭引膝杖指引腕推指執
この目々々々々々也指引と今見及ばぬや

うれまど前條小いつる指きうなるは〜但り
ハ指負まゝるゝざは〜後ハありぬるは〜
その類

耳引うけ
耳引うけあつべし其山が色道大後ハ左の如
ハ張うゝんに賭を定めば〜ハ不興なる但
定むる者耳引うけは竹篋うけを〜
耳引うけハ類ハ左記の如る〜竹篋ハ指志
つ〜ハあり〜指の力を頭ハ〜
拳螺サエのふ〜ハ破〜

江戸にてかけら

江戸にてかけら〜ハ梅雙紙翁人巡舞の
事記り〜知昔の翁人ハ〜ハ春〜
き〜ハハ今ハ世ハ〜ハ〜
る後世依ハ是と走り〜
ツツホルハ余所メ耻カニオソラクトイヒモ
マクル走クラ古今夷曲集ハ〜
いふ〜ハこの浦風ハ〜
其角ガ苑摘葉葉帯ガ句世活の月〜
に息まれ〜

と裁俳諧錦繡綴よ宴りにさるふのれきハ比興
ある山 蕭迷惑ふ馬よる新袖彫 篋紙輪よ若子
の抱守り袴きた馬より向も有江戸近在平井
村アタリノ小児ノ遊ビニ馬ヲ追フ学ヒアリ一
人馬トナルモノ繩ヲモテ首ヨリ背ニカケテ結
ヒ両午ニ扶ヲツキ馬ノ足ニカタドル一人其ツ
ナヲ牽テ行心
肩ら 海は 古く かのびとワケし 義経記
よ奥州平泉寺見物の糸福んいし居たりてめ

いよ小 児子 行く ち北北 柳柳 して出で ちとろ大大 小小
のかたろびよみりてどああ りる近近 くハ万派
二年印本私可多吐吐 江戶葭原の事詠りふ処あ
とと ころかか ち海海 少少 きたり云云 ちち
多多 小小 ちけおとの肩肩 づまハ若若 柳柳 づんて
たまたま ちち ちち

多車

今昔の裁よ二人二人 ち古古 の多多 詠詠 組合組合 をを ちち
よよ 一人一人 とと 糸糸 ちめめ ちやたがたが ちんちん ちち 後後 と
ちやに上上 ち引引 ち物言物言 ち多多 車車 ち又又 伽羅女伽羅女

ふのぼるそのおれを登魚梁と云ふおとてこゝ
しこやこがににこいといけおれ子とも此あ
た集うて常にとりてきておかくれびとせ
るうの上と一人のぼりくさひありくみうあま
のぬのぼりと名付きてたりふれはは世歌
他國よかありもやとん江戸よか似るもあれ
しここの名あまやあまは存のまゝに常にとり
能くあまのぼりて居るけりくもまやしどに辛む
しこぼるおやうしぼつてことりいけい
まゝくけりきて先よ立るものあまのくのせ

ん次市と叫ぶ最後は居るものおれおとあ
よあて何用でござるといふ叫ぶ者もあま
何とて居た名あまのぼりて居る鉄を合て居る
まねくばあまのぼりて居るけりくもまやしどに辛む
しこぼるおやうしぼつてことりいけい
海りまむつたあまのぼりて居るけりくもまやしどに辛む
しこぼるおやうしぼつてことりいけい
こてまねと先の中一喜は居るしむさて初め
如くまやしあむしもやうまのぼりて居る
おれおれと云ふおれおれと云ふおれおれ

二人と後とに句と云ふは多岐の事合々の
多岐言く奉いしこいしと云ふは志しと云ふ
あまのの子流りの引合たり多岐神り多岐ぐり
振る付多岐引く者流りよある者れりしに向
たりと云ふ者流りつと云ふ者ハ云ふれ
しこいしと云ふ

鬼の留をせんとす

各着る物の清まらざるに多岐て流る多岐いし
て鬼との多岐と洗濯と云ふはついつ、衣もは鬼
と多岐たり者類と云ふはついつ多岐の、清ま

とつ、けと云ふは鬼の留をせんとす
の清まらざるに多岐て流る多岐いし
、つと云ふは鬼の留をせんとす
さしと云ふは後撰夷曲集無常部
テ我心鬼ノコスマニセニタクセウ欲垢アリテ
隠期ハウニ友貞

目白押

目白おし鷹筑波集椿原小油おし
懐子五にあいてめりぬ菟乃目白おし大倭本
単に補眼兒常熟縣志曰最小而巧今按云々よめ

つばな也小児こねを揉て嫩穂を出して倉小綱
目の集解も益小児といつて夏よまきバ穂長
く出白き絮竹この絮は二ちとね花伝実乾片
百首イトオニヤマダカフロナルウナイドモヤ
ケ野ニアマタツバナ又ク之古き穂穂よ是辰セ
ハハヤあつとつる袖とソふ向よたさねまう打
つま立とぬく帯花と竹の是を揉子ひの或靴の
玉あるそとつらま千の苑や絮とちまぬるは
靴といふは俳諧懐子 卷一 迷ハされぬく神ハ靴
つハなるま又巻十靴の多き芝系の中たたる色

ぬく惣法ハるははハるハヤ是帯花苑のたすて
靴と下るまぬうがうし体惜むるづしあはる
玉何たりやめて世談ハ記しとあはる又綿よ
靴のまじりてはるハるハるハるハるハるハるハる
るハるハるハるハるハるハるハるハるハるハる
見ハるハるハるハるハるハるハるハるハるハる
けりしの際や中念よハるハるハるハるハるハる
て上綿バハるハるハるハるハるハるハるハるハる
こハるハるハるハるハるハるハるハるハるハる
つハるハるハるハるハるハるハるハるハるハる
俳諧江戶校

折紙がけく紙後方の損
手にくまを能くときめ
すゆ一よ六方史との
夏をもちて水こいある
たやうよ六方史殿の
りゆとりふく指に
長老心らんとて
る処に
世と近時

凡そらふこ
侍後の表
思ひく
薫の心
兄弟
俄
やた
茂く

いゝゝゝやめくゝ又鷹築波はあゝいゝのす
うまもきゝだやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
本此のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
た福ややにちや坊やちや坊とゝ小児のやに
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
牧孫よゝ花ゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やふちやふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひゝ半ふあゝ雨夜三杯撥嫌悪礼會大盃催
乱舞障者原々言押者邪々跨又物類稱呼と志二
むとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
総中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝのちゝ家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かり居あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝもふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

りまゝぐうに山よりおちてくつゝぬきと
たる枝りすたすのぬ物よ、あまどるゝ先ふ
うき心よりまのともありあむ和名抄に杖極とまた
ぐうや刻り樹枝をりふし花鳥餘情に木の枝よ
山たりなる枝遠く花より印極杖よはくぬ
きたるじといつ江次第二曰絲所進印極蔵人
取之結付晝御帳懸角柱副立細木為柱槌末出五
尺許可用桃木又四角可削近代丸也失歎おのふ
よ印極と印杖は長後よよて名ありあまの
やにふし神の物に延喜兵衛府式云其御杖楨

楹三束一株木凡三束比々良木二束中畧梅木三
束椿木六束ふとこの史本集色よりぬに死の
峯のお枝衣より八五代の印杖よとまはる西宮記外
杖春宮坊立業蘇芳木云作物所供御杖四枚作
御生氣方物形置洲濱上云々持統天皇三年正月
乙卯大學寮献八十枚漢宮儀云正月卯日以桃枝
作剛卯杖厭鬼らまじり漢宮の剛卯よなるいぬ
つゝものし御生氣の方物杖をぬく風流の儀
おさし竹の後のまじり源氏の孟津抄よ海の中
に生糸の

方々歌を傳へて卯杖よあはれむまを山に生常
東よあはれ免南より馬をさぐりて音尋所よ
初より新古今集後次泉院おはるくたはれし
後付外杖の松と人の子に結つてさるよよと竹
くくく 大玉之位お生のをくけり山め小松系介
くくく 子代めくけをくくく 剛卯のたて漢家の
くくく 天祿識餘説文鼓設大剛卯以逐鬼
也廣韻剛卯又謂之大堅以辟邪也漢書王莽傳云
劉之為字卯金刀也其去剛卯莫以為佩注剛卯以
正月卯日作長三寸廣一寸四分式或用玉或用金

當中穿作孔以絲絲葺其底如冠纓頭鏤刻其上面
作兩行書北堂抄云漢家以五月五日用朱索連五
色剛卯止惡疫也沈約宋書禮志十四舊時歲旦常設
葦茭桃梗磔雞於宮及寺門以禳惡氣云々桃卯本
漢所以輔卯金又宜魏所除也云々宋皆省而諸郡
縣此礼往々猶存云々か、ま、ば、ら、く、り、ハ、杖、
ら用るる物云々舞田の神事には卯杖舞とるはハ
つのは云々春とにう知少は地底よ四月十一日
舞田の宮前よく宮人卯杖舞を奏し信從竹川と
くくく 尾張踏舞の頌と唱くく 高巾子に神人鼓

鼓吹振り侍りさ後いりし昔おほしき事い
しきもの奇曲は枚の舞を子孫引く要しとある
したれども畧さずと或人漢土の碌碌とい
る農音より出づりといつるはうけかきし歌の
似たりといふはよいかいまも用ひざる物に漢籍
し見かき見をの歌既し他も多しやする野
守鏡よりいふにけりふりいまたくもすい
るぬされふる常なりはふりくもてある
ありこはたは政る時の形容の詞に打録の騎馬
ふりまう撃りさたる唐の代に既ありはるは六

にり盛よりいふに万葉集 四年丁卯春正月
云々 右神龜四年正月数王子及諸臣子等集於春
日野而作打録之樂其日忽天陰雨雷電以時官中
無侍從及侍衛勅行刑罰皆散禁於授刀寮而安不
出道路云々 といつるは、
統日本後紀仁明天皇養和元年五月戊午
亦御武德殿令四衛府馳尽種々馬藝及打録之態
なりとありし又舞樂より打録樂の節會の馬藝
おこるし、
此の樂は唐より入るん平家朝
詔より後多岐院推さし時打録し玉と愛させり

ふら文寛、練打冠者比の、
く是如正月の、
十節録、
杖是也、以彼例、漢土年始用、
本國学其例、年始打、
に、
練杖の玉と人の首よる、
この俗説、
紀元、
以資玩樂とある、

振々ト称シテ、
杖ノサキニ付ルモノ、
リニ三歳ノ幼児ニ少キ、
帖シ雀亀松竹ナト作テ、
称シ其余ハ玉振々ト各別ニ呼フ、
ツレモ木丁ト称スヘシト云々、
昂チ昔ヨリ、
ハ諸具ノ蒔繪ニモアリ、
リテ今ノ体トナレ、
レハカク云ヘリ、
ノ内ノ七宝ト云物ノ如ク、
彩ル振々ハ木ヲ八角

二削リ両端ヲ細ク中ブクニメ細キ方左右ニ
木凡形ノ穴ヲ穿テ此処ニ前件ニ云処ノ玉ヲ付
テ惣躰金箔ニテタミ其上ニ雀龜松竹厨燒等ノ
繪ヲ彩色ニスルニ用ル時ハ左右ノ玉ヲ取ハナ
ナニ別ニメ是ヲ擲ツ玉トシ八角ノ木ノ木凡形
ノ穴ハ竹杖ノ如キ棒ヲ貫キ柄トシテ是ヲ玉ヲ
打録杖トス略メハ皆己カ得物ヲ用上トシ
玉の形も古今異なり其説の如く録杖
より一物なり柄は諸般あり用
途は或は帯ふと外用は或は

若く画行よりト事ハ野守鏡ニ下総ノ
千葉ナドニテ玉ヲキルト云テ今モ弄ブ玉ハケ
ヤキナドノカタ木ヲ丸サ宜キ程ナルヲ小口
ヨリ挽キリテ用杖ハ木モ竹モ末ノ処ヲ少シ撞
木ノ形ニ作ルヲヨシトス凡ソ二十間ハカリモ
隔テ玉ヲ縛シヤリテ打スルナリ玉ハ初メ地ニ
打ツクレバ廻リテ走リユク世間モユク間ニハ
三四度モ地ニ付テハ飛上リニシテユクモノ
ニコナタニ居ル者幾人ニテモ并ヒ替彼杖ヲカ
マヘテ玉ノ来ルヲ待テモト来シ方へ打返スカ

まゝ風ふ帯よりもとまたて流石の玉あり
春小北寛文元年帯にの作じ
うつといつた麻布やりおりのすりよか
いおとあいかいおとかひすいおと
詞とほくかいはおとい玉振くと
いづゝハ帯じまた玉練打い元隣が誰
身のう二暦巻二上うさうり玉練打ふ
りくゆり信は上又りぎつちよと
いいつた松の葉系をり小太右史命に先正月
ハ云ふりぎつちよは子にふきて玉はり

出乃もりやれど所のゆり玉練打な
れ紐をける振りのゆり玉練打な
け紐をける振りのゆり玉練打な
け紐をける振りのゆり玉練打な
に破る玉練打養名小乳母後儀り並且又もぬ
も大板女の子一並是こやれりりり玉練打
るきハ祖父祖母を並とりり小系師よハ小児
生まる初めての正月母の親里り玉練打贈り
女子にも贈りハかかかか次の年正月ハ男子に
ハ贈り女子の飾りハかかかかとふるハ母の
古風ハもの者ハれハもの事ハいつされ

之瓦にま雲岡抄の葉をさふなり清俗モ此日
ヨモキ菖蒲ヲ用ル一ト同ニ松亭行紀都城人家戸
懸赤靈符菖蒲艾葉重午ノ日還駕ノ処サツキノ
玉夫木抄第七氏部ハ為家花のむかひのあよ
ぬきとめてさうつとよめの姿とみり河海抄
小續命樓靈絲絲なるい下之れさうぬめ
神しとさうの女りさうの端午にりてあさぶ小ぶ
りさしとさうの雍州府志葉玉の糸下に端午の
上は云て以彩絲作花枝貼白紙上掛之於女兒背
後是謂藥玉古以丸棊交其間避穢氣長命縷之類

也ト所ハ是乃さうの年中故事要言民間ニ
モ五月五日女童ノ翫物ニ色々ノ作り花ヲ糸ニ
ツケ紙ニ張テ下ニテ用ルハ葉玉ヲ下ニ習テス
ル事ナリトイフおろり其の形ハ今以兒女子
月名ノかきさうのなるさうのあはれをれ
ヤ似さうの後ハさうの用ニはさうの只もてはさうの物
ニさうのさうのさうのさうのさうのさうの葉玉
是河海抄ノ御記曰延喜十三年五月五日丙午絲
所供奉葉玉如常撤去年九日棊莫以葉玉懸替着
御柱前例也梳双紙ノさうのさうのさうのさうの

あつしきりやあらしされとされおえかいと
引くしておゆひをたしてたましくおれとて
たりぬるの重瑞小菜おれ撒り菜更おぬるを
つゝぬるの小菜更二條あり古製なり也
以菜更の菜種の呉菜更少く食用の胡類子
あり其衣服は袂の帯事お小も左一
又為菜種家集菖蒲露引の太はあぬるの種お袂
さ月のおれかゝるあり雲州消息
一名叶云今朝自或所給菜玉一流作以百草之花
貫以五色之縷換草貴欣柄其花房云云

古くより虚飾多かり近世堂上より十二月の御物
にて毎月お新よりの行は菜玉の如く五色の
糸お垂る頭の方に正月より草木のおまき、鳥虫
などを御しそのに御し御し古代おき物との
に菜おぬるおしして御し出る御し
玩物大抵後水尾院東極
内既にお玄巧なり
菖蒲曹 菖蒲饅
菖蒲曹の辨内侍日記に建長四年五月五日の條
女房より小おやぬるふとせむせ苑とも
やめかつるけはりぬるよ云々
女房より小おやぬるふとせむせ苑とも
やめかつるけはりぬるよ云々

是等ノ又端午ノ諸衛府甲冑以着ると是喜彈正
式ノ見一たり後小児童のよてり其故あや先冑
小形ノ始園大曆文和四年五月五日條ニ今日加
茂社競馬神事如例彼是云今年天魔流行云々童
等結構菖蒲甲冑学合戦所々催其興童部親類已
下成人武士等相交刃場殺害所々数輩云々誠不
可説事歟と云元たり是印地の裁りノ懐立本
刀此と云り云々此小この遺意ノ諸社根元記藤
森縁起云毎年五月五日祭礼神幸之時在地之神
人等鎧甲冑帶弓前列騎馬自尔以降洛中洛外至

遍土遠國小男童兒帶作太刀刀等以菖蒲飾之稱
菖蒲甲是則當社祭礼供奉行装也此の一事も
さしりにも多り深寛永落向帳よりさしり
布張の志や一ぬ力に於雄長老而首可一はまに
新のよまいれ石よりてり菖蒲刀はまのこれよ
り「紅梅千向」持しきよ「新きまやう」具
是五月の口の向くこれよま「洛陽集刻」さしり
いづれは「洛陽集刻」行正中古風俗志ニ事保
ノコロマテハ所々ノ廣小路へ童集り菖蒲ニテ
大キナルフトキ三ツ打ノ繩ヲコエラへ或ハ長

竿等ヲ持出往来ノ子供ハニヤガメ々トイヒテ
下座ヲサセモニ下座ヲセザレハ打カセリナト
ニテ使ニツカハシタル小襦布ナ小重箱ヲコハ
サレハフ々逃カヘリニ事ナトアリニカ今ハ絶
テナシトイヘリサレド予カ幼キ頃マデモ童共
人家ノ簷ナルアヤメヲ竹ノワリバサニテ取
アツメ三ツ打ニ組テ持アルキ他処ヲ子供共ヲ見
レバ此繩ニテ地ヲ打艸ヲ脱テ下座セヨト云
サレバ下座スル童モナク又強テサスルニ及ハ
ズ唯カクニテ遊ブナナリキ今モ此戯スル処モ

アルベシ

削りかき削

志ヤカ削

削りけの曹ハ俳諧懐子明曆二年甲子みまバ削

かきし路更小まゝ麻草や馳走カ肉田順

也ハ俳諧五節句貞享大ハ核物師細工ハ人形

ハ武者ハ舟ハ舟ハ要家お流の挿巻ハおるハ活

也ハありハ志ハ核ハ木ハ核ハつハんハふハにハ削ハ後

舟の長きヤハふハおハとハ為ハにハ深ハいハとハふハ

削ハさハぎハにハ削ハりハけハのハ甲ハ子ハハハ賣ハ

ヤ又ハつハつハかハきハあハぬハ小ハ舟ハハハ高ハ原ハ寺

いづれ好色つれ草七夕に事なす百姓の
麦刈りにて馬人飛脚作て高き市のうへに
あぢいづま川より水汲み信公松崎に七女は
い町に籠りて家と家との新ふしけ路を横き
くあゆみ人形といふおろしき紙衣を
せいそうとせしむる籠りて紙衣を
またりふしき七月の十日に七夕を家
の紙衣をせしむる籠りて紙衣を
またりて籠りて紙衣を

りまづ大に行列のさるれど川に船ありて
川の晩方より川水は流し捨ておき
に牛は七夕に因りて霊柩は牛馬を向ふ事
七夕は移りて人形とさる籠りて紙衣を
とせしむる籠りて紙衣を
編みたりしおもしろき命は信公に
とせしむる籠りて紙衣を
散木集の連歌は紙衣を
あたる知て承源法師は馬のうへに
籠りて紙衣を

中定例記 室町殿の頂の年 正月十一日の條比五
尾山布し山系 うち出りく山いやけ々これいた
これの太白貝已下 うちまじ 塹囊鈔六 爆竹の條
よ羽子板の衣出さし 初春よ用ひしもの炸爆竹
に焼ことるまも羽子板もものうちよ入るま
らむ餘諸水鏡よさ然ちやまあるは塹囊
ふよりあよりや爆竹の画を板のうらにかきを
ふし其のまふまきるふ少きし世語問答にこそ
けこつくるハ收紙遊る児なるま 見白早衣よ
り夏口け虫紙まむといし 附倉の説るま

ぬ田舎のま板妙くたし小異なりといし
ぬさぬかみさぬ画々を奥か三春にて作
海も同し 信濃ハ二板ハ夫婦の祈は 肉裏羽子板
こりふそ社儀なりし 宝藏卷二 記さし妙き
家じりじ 紙今くささぬまゆし ぬ子やま
こゆふたつれてまご板の絵けやにむいお
たるよこつうハたのしと思ふく先一代男 卷
ま六板の画も夫婦の祈し 肉裏羽子板とせし 諸國
咄 貞享二 年板 肉裏羽子板とせし 出し
独りゆつきしにまれハ 埋突^{オメツキ}うと中を長男

せのいー今も歌よハこきのこもソよ丁世も
いー市街の裏比殿山なるよも何の世もよ
ハたふししと味と其江戸少その今ハつくと
祿ものい祿長漢土よりけ子に似るよその何
廣東新語九卷廣列時序正月條書則踢毬五仙觀毬
有大小其踢大毬者市井人踢小毬者豪貴子云々
また同書一十卷土言の中に以鶴翎貫皮錢踢之曰
踢毬々亦曰燕す、清朝探事に鞵子とて雜の毛
と結ハ申して錢よ貫き蹴りする遊ハあり又清
俗紀聞正月の糸兒女共よ見蹴テキとて雜毛三本又

ハ五本錢よ拂之給めと包之是ハ蹴テキとて蹴テキとて蹴テキ
さの毬ヒと鞵ヒとハ音近く同物なり見蹴テキの見も鞵
さの毬ヒと鞵ヒとハ音近く同物なり見蹴テキの見も鞵
きりや六、何れ子何れ子の相よて堂也々々
まど昔々維と用ひしよヤ重た、揚吟百韻とて
れうたのめ維よれめと多れをけく胡鬼の子候
かけくばう、咏物詩選蹴鞠ノ詩ノ次ニ踢毬明
馬如玉腰支嬢々力微々滾々紅塵拂羽衣掩月鬢
辺星独墜石榴裙底鳳双飛トアハハニウキクト
コトナルへニ帝京景物畧云童謡云楊柳兒活拙
陀螺楊柳兒青放空鐘楊柳兒死踢毬子楊柳尅芽

見打板見コノ鍵子帚ケニテキニ板見ハ小兒以
木ニ寸製如束、横置地而捧之一撃令起隨一撃令
遠以近為負曰打板々古所稱擊壤者耶其謠云揚
柳兒云々

河まが川

源氏物語新編の上下巻に於ては、
小めのと少はきて河まがやりの人へは、
かゝ河まがつや、河海抄に
尾見と云ふこのや、河まがの河海抄に諸事凶
るは是よおふと云ふ、源氏上巻

明石の姫君皇子は、葉のうへにあまのつね
と名ちぢううは、河まがの河海抄に
ふと心もつゝ、河まがの河海抄に
と云ふ、河まがの河海抄に
知小き地務井は、河まがの河海抄に
まがのれとの、河まがの河海抄に
て河まがの河海抄に、河まがの河海抄に
按るよあまの、河まがの河海抄に
児字は用ひ、河まがの河海抄に
と云ふ書り、河まがの河海抄に

筒上以白絹造偶人首建之於尺余竹筒頭又別以尺許竹筒橫首下是為肩以置小兒之枕頭云々六
 毛ぬいの製造なり和訓栞に城後にも造るハ老
 女の面は造る肩と胸とを竹筒とにめて内は護
 身符を入りし栞社の山籠よりすがつたす
 事口中以事よと一たりといふ
龍分所志に城殿其家之祿号
 馬井氏也相傳元三韓之政化人而始往近東坂本
 馬助井自茲統為氏云い安弁云今も故庭和泉こ
 て系より所婦人脈脈の具麻の敷前其物と物と
 作る歳人そ歌合巻紙賣りてこれめやきどのにそ
 御るそ

まに

まに伽婢トギバコあもりし母子の義少く何まうつ
 と同類の物なり作樂守貞陸産所記よりまか
 つ一ツもこれ事じたまニツ三ツの子のたに
 あるしこれ孔の箱あつたにさぬこれ天
 兒もこれ物に造るやうかしくう
 て又まにことりし名も物も先おるし一人
 されど妹小兒を以々系とり今三月は雛系
 録に嵯峨天皇太后崩云々先是民間訛言今茲三
 日不可造糕以無母子也識者聞而惡之至于三月

官車口駕是月亦有大后山陵之事無其母子遂如

訛言 三代実録曰田野有草俗名母子草二月始生

莖葉白脆三月三日婦女採之蒸持為糕傳為

歲事此れと漢名鼠麴と云ふ草と云ふは古

用ふれしもの草條つくるといふは古

二行の母子の世に云ふは行の御婢子と云ふ

ハ彼と云ふは先たる名に云ふは母子の義に

かふと云ふは御婢子と云ふは後人の呼號也

よし此 天児の世に云ふは此の世に云ふは

野上あまの世に云ふは御子と云ふは

御子御婢子御張子と云ふは母子の行

本此寺の御子と云ふは東海道名不祀ふとの

号に御井と云ふは松雲と云ふは御子と云ふは

如恨子又瓢水子と云ふは御子と云ふは

起りて云ふ御子と云ふは御子と云ふは

と云ふは御子と云ふは御子と云ふは

犬張子

犬張子の産所記に云ふは此の御子と云ふは

に犬張子の御子の御子の御子の御子の御子の

産所記に云ふは御子の御子の御子の御子の御子の

由一ハ守り此の御子の御子の御子の御子の御子の

またハ肩持此の御子の御子の御子の御子の御子の

法華寺と云ふは尾寺と云ふは御子の御子の御子の御子の

と云ふは御子の御子の御子の御子の御子の御子の

の履のいろはのりきし其或は中祀下心のふ
新ふし心之存りしは心動ふ事ありの處
つらふよ大の表志作らばつらふ反古ふて心れ
け家送りたふし又云ふよ古ふて他をるま
之四深氏卷多音字にけさるはさ西文の事れと
ふよふいまふの表送りたふてあまの心れつ
ふらふしつらふ心れとあり音義の古今ふら
る事れつらふしつらふ小児の言葉と飯を中へせ
りふ心れつらふ飯の食物は料理はつらふ
ふれつらふ女子のふらつらふ甲陽軍艦二歳田信

長公知少の付尾分治點寺一子也つらふ
とは名は江蘇とつらふ心れつらふつらふ
つらふつらふ河下首歌を飲茶茶如竹つらふ
中つらふ心れつらふつらふつらふつらふ
海磐磐つらふつらふつらふつらふつらふ
りや俳諧水鏡つらふつらふつらふつらふ
あつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
ハ名口つらふつらふつらふつらふつらふ
まハ今日つらふつらふつらふつらふつらふ
つらふつらふつらふつらふつらふつらふ

三日薨る云々いふ事既に日後とつて事と出さる
寛文元年一雪の独冷百病ありとむるりさても五
位の子も厚化のふり多しハたは祝言の又
難し同八年刻梅盛の撰一了細少石上草紙此け
ふいりふ條をやいのいふ州重尚條とあり
一草上事なる餘心つか 難雲 延寶八年洛陽集三
月三日云々事のや神り此命也史婦心不 牧亭
黒糸のむきふ事や史とと云ふ 女後戸柳の答る
い子心なるさる 同福より事 漏危 妹也や云ふ
けりし事一云ふ事とに事 有知 六一かや子指

なる此は難の節句 自悦 三行の世傳ハ事と節句
ことなる 同集 春部 飯本にや難のつたなり七句
事と云ふハり事と云ふ 小三事のたは後世事と云ふ
志る行り一七ハ寸或ハ一天の中こゆら北とハ
いと近き俗化新の五元集難や事ハ春とん小た
てし海らハ多事折葉子や井筒小節とていふ事
た事厚澤六年壬七月十九日若狭の船人秋葉来
之次上方ハ仕入中をハ事ハ不心滑ハ後有ハ世ナ
紙ハハハ紙若事ハ一何ハハハ一ハ右若事ハ後白後
心解ハ後ハ寸けハ上極ハ事ハ事ハ合ハ紙子ハ装

しきあふはふこねを買く用ひし身くこぬ滑
誓太平記ヒナヤ立圃カ傳ニ寛永十六年ヨリ祇
園會雨度ノ山鉾練モノマテヲヒ十人形ニ作り
金銀ヲ鑄メ綾錦ヲ飾リ大造ノ膳ヲ以テ首尾ニ
明ル十七年ニ武江ニ持参シケルニ心當子カヒ
テスベキヤウナリ引放シソ、拂ケリ又宗門ノ
大乗寺へモ納メ残ル処ハ明ル十八年正月廿九
日ノ火災ニ滅ス云々
繪以爲 安返酒
生薑市
絵櫃とソ、その有俳諧五節句 貞享 桃の絵櫃 同
折

市地櫃小櫛柎を絵かく櫛の月よきの縁小系飯
小入の山タイカヒ櫃タイカヒとソ、その序是れ小櫛柎の
分是五巻ノ市地の挽物小繪所ノ土佐日記ニ
月十六日トシテ、
れむ小櫛の小櫛の縁小櫛柎の序是れ小櫛柎の
もか、
ふれ、
又三任國ニテ幼女ヲウシナヒ歎キノ意前文往
往見子今此処ニテ夕夕モ小櫛ノ賣モノハカ
ハラ子トモ幼キモノハウセ夕夕ト思ヒ出ラル

さし、さきよむをさすぬに出し、すは一珠櫃の底
ふり、ふ小判をいなり、さきすくハ、之北務長に櫃
の、さ、北務長、江戶、ハ、九月、迄の、北務長、祭礼、ハ
ち、北務長、の、さ、北務長、入、の、祭礼、ハ、後、北務長、ハ、さ、
ハ、三月、ハ、さ、北務長、ハ、さ、北務長、ハ、さ、北務長、ハ、さ、
したる、さ、北務長、ハ、さ、北務長、ハ、さ、北務長、ハ、さ、
小、さ、北務長、ハ、さ、北務長、ハ、さ、北務長、ハ、さ、
御宇、諸國、郡縣、ハ、屯倉、ヲ、設テ、民、ノ、洪旱、ヲ、救、玉、フ
リ、ノ、穀倉、アリ、之、故、ハ、民俗、飯倉、領、ト、号、ス、是、ハ、依
テ、土民、此、処、ニ、シテ、飯、ヲ、扱、フ、益、ヲ、専、ラ、製、ス、付、杆

木、鉢、餅、益、等、ナリ、千、益、ハ、古、ハ、藤、葛、ニ、テ、ア、リ、餘、ヲ
盛、ニ、ヨリ、テ、餅、益、ノ、上、略、ナリ、ト、云、々、コ、ノ、説、非、ナ
リ、千、キ、ト、呼、ハ、社、ニ、用、ヒ、三、千、ギ、ノ、餘、木、ト、云、ヘ、ル
意、ナリ、又、こ、の、祭、礼、ハ、北、務、長、ノ、氏、子、以、家、ノ、醴
ニ、献、ス、也、北、務、長、ノ、氏、子、以、家、ノ、醴、ニ、献、ス、也、
ハ、祭、礼、ハ、生、氣、ヲ、養、フ、我、ノ、西、宮、ハ、是、等、の、祝、儀、
ハ、五、カ、ハ、進、歩、ハ、見、ク、申、ス、享、保、十、七、年、小、カ
ハ、三、月、ハ、又、目、物、ハ、三、月、ハ、草、餅、之、を、以、テ、祭、
ハ、入、テ、醴、ト、錫、ト、入、テ、親、類、ハ、遺、産、事、ハ、三、ハ、
ハ、考、の、か、く、余、ハ、白、酒、ハ、考、の、か、く、又、あ、る、さ、け、ハ、

用云くはるる五ノ飯食非以条よに抄之也
 の歌よ月いしものふれ

 酒今起りて繁茂とて
 かも瓦酒底の鏡とて
 山川酒六條油小路酒
 白右左と濁る世酒多
 く夏口逆しとて
 白酒は
 宜胤郷記文龜二年
 正月廿五日内裏御月次和歌御會云
 酒等甘サゲナルべし御傘ニヒト白酒夏ニ夜分
 ニアラス夜字ニ句嫌々醴字ヲ書故々アマ酒ト
 モヨメバアマサケモ夏ニ六月朔日ヨリ七月廿
 日マデ日毎ニ奉ルト公夏根元ニアリ風俗文選

吾仲カ飯鮮銘ニ云飯鮮ハイツトノ時ヨリモテ
 ハヤニケニ此六条ノ名物ニハズヘリタル今才
 ホヤケノ奉リモノモノニカソマレバ下サマノ
 人ハ日ヲ限リテモマツヘシマシテ卯ノ花サク
 オロハ此モ人ノケニキモ清カラニ藤ノ花ノ
 サク時ニソレカ節ヲアハセタラズイカナル人
 ノフカキ心カ侍リタニ是ニテニ季艸ノ各モ世
 人ハイフヘシ器物ハ松ノ香氏テツケタル折ニ
 イレテ此花ヲカサニテ又ハ文書下付テヤル
 へシカクコトコトニキヤウホレドスベテ上サ

う見し男雛太刀帯女雛天冠はまききくは
行り言せし寸みす許ありは古物なはあつた又
奈良の飛木舟りに彩色志をも古物志の存好
事対者脱ぎの根は月ひし大く緒とと
を以て宛あはれし男女の祈籠屋立圖ふと、絃の
さぬは似たり菱川師造ゆくの飛の祈りめは
模と誰袖海に祿と冊子は菱川氏の業対品
面敷うつは婆娘のこころは女はいふた
口ふし包より巻ふせりきむくはせり衣巻人
飛といふは以呂芝居白蛇草子と物は菱川くと

飛といふ人飛は地りゆり又上子にく去かたは
り心屋は彼者古の姿はまづ刻之舞衣巻
毛は上新衣さし上るといふは非ありし上
あひる冊子は紙をよみ換へるまづ剛たり
しは古の衣裳は箱舟にくはるは衣巻の飛
こりし彩色に志をもと奈良人飛めやけり
りや室のそのあり他し事なり古は必ずは
は、死上彩色志たりは彫刻の他人はさせた
るに、是又衣裳の飛はしは今押絵たり
り世に子ナキ女ノ人飛ヲ愛スル者アリ子ヲホ

三夕思フ余リ之漢土ニモホレアリ板橋雜記ニ
顧眉生既屬龔芝麓百計求嗣而卒無子甚至彫其
香木為男四肢俱動錦綉襦顧乳母開懷哺之保
母褰襟作便溺狀内外通稱小相公龔亦不之禁也
時龔以奉當寓湖上杭人目為人妖人倫訓蒙弟彙
之衣裝人形之諸物を以て絃を切板木以て
法くる云々又同子より紙を以て衣裝を以て
紙を以て衣裝を以て紙を以て衣裝を以て紙を
以て衣裝を以て紙を以て衣裝を以て紙を以て
衣裝人形といひて雍分府志に衣裝人形本偶

人作男女老少形施衣裳其小者謂友子人形云々
行ハハ木彫の人形は箱布に着せたり也次云
元文中に板車三冊云々の春苑結繪合にソノ
文字の押繪の志はた此等の道に云々要云々
是解小の云々云々云々云々云々云々云々云々
述異記ニ高江郎雜記直太内見三異物馬一小金
盒大寸有六分内貯彫刻牙器百種如儿搗舟車盤
匣筆研投壺碁局絃管外斗算金鎮鉗而觀之其一
鏤象為球周身百孔凡九層亦有七層五層者以金

紙之海 四十 五ノ才

合点首 四十 七ノ才

残太鼓 全 十ノ才

尻車 四 十 八ノ才

張子 四 十 九ノ才

獅子笛 全 十ノ才

考笛 全 十ノ才

後松篁 五 十ノ才

雲雀篁 全 十ノ才

伊勢ふえ 全 十ノ才

麦笛 全 十ノ才

ポニピニ 五 十 一ノ才

弾き様 賦を海 五 十 二ノ才

初まゝ様 全 十ノ才

つふり様 五 十 三ノ才

糸摺り海 五 十 四ノ才

水挽り 全 十ノ才

桃核の猴 全 十ノ才

蜜柑汁 五 十 五ノ才

松笠の鳥 五 十 五ノ才

鳥絨の甲の松の蟻

松笠の瓢 五 十 五ノ才

若苔の雀

五十六ノ才

折紙の蛙

五十七ノ才

折紙の鳥

五十八ノ才

紙摺細工

五十九ノ才

とさみ紙切紙

六十ノ才

假面

六十一ノ才

般若面

六十二ノ才

し柳苔の面

六十三ノ才

天狗の面

六十四ノ才

志布志

六十五ノ才

菟子人形

六十六ノ才

身元以上の小人形

六十七ノ才

角力人形

六十八ノ才

合平人形

六十九ノ才

稚子人形

七十ノ才

西行 鈴

七十一ノ才

摩睺羅

七十二ノ才

繪幟

七十三ノ才

祭燭の燕 ミシガ

七十四ノ才

小襦

七十五ノ才

第の園麻 七十二ノ才

麦^ミ_ミ地 七十二ノ才

つぼ^ミ 七十三ノ才

削り^ミ 七十四ノ才

條^ミ 七十五ノ才

ゆ^ミ 七十六ノ才

とせ^ミ 七十七ノ才

五年^ミ 七十八ノ才

荷^ミ 七十九ノ才

一文^ミ 八十ノ才

浮^ミ 七十九ノ才

酒中^ミ 八十ノ才

井の^ミ 八十ノ才

ふ^ミ 八十ノ才

典^ミ 八十一ノ才

人^ミ 八十二ノ才

本^ミ 八十三ノ才

き^ミ 八十五ノ才

得^ミ 八十六ノ才

何^ミ 八十七ノ才

かきう原北 九十六ノウ

草むし 五十六ノウ

江ノ橋 八十七ノウ

篠松 九十一ノウ

草芥葉丸 五ノウ

松の葉丸 九十一ノウ

瓜戦 九十一ノウ

豆奴 九十二ノウ

薬物の焼菴 九十三ノウ

嬉遊笑覽卷之廿二 喜多村信菴撰

獨樂 ぬせうこぬ ちかたこぬ

和名抄一獨樂和名古二末都玖利三有孔者也四

今昔物語大江定基出家語の内寂照一前二録三

俄一狗鵜二の如三く四る五る六る七る八る九る十る十一る十二る十三る十四る十五る十六る十七る十八る十九る二十る二十一る二十二る二十三る二十四る二十五る二十六る二十七る二十八る二十九る三十る三十一る三十二る三十三る三十四る三十五る三十六る三十七る三十八る三十九る四十る四十一る四十二る四十三る四十四る四十五る四十六る四十七る四十八る四十九る五十る五十一る五十二る五十三る五十四る五十五る五十六る五十七る五十八る五十九る六十る六十一る六十二る六十三る六十四る六十五る六十六る六十七る六十八る六十九る七十る七十一る七十二る七十三る七十四る七十五る七十六る七十七る七十八る七十九る八十る八十一る八十二る八十三る八十四る八十五る八十六る八十七る八十八る八十九る九十る九十一る九十二る九十三る九十四る九十五る九十六る九十七る九十八る九十九る百る百一る百二る百三る百四る百五る百六る百七る百八る百九る百十る百十一る百十二る百十三る百十四る百十五る百十六る百十七る百十八る百十九る百二十る百二十一る百二十二る百二十三る百二十四る百二十五る百二十六る百二十七る百二十八る百二十九る百三十る百三十一る百三十二る百三十三る百三十四る百三十五る百三十六る百三十七る百三十八る百三十九る百四十る百四十一る百四十二る百四十三る百四十四る百四十五る百四十六る百四十七る百四十八る百四十九る百五十る百五十一る百五十二る百五十三る百五十四る百五十五る百五十六る百五十七る百五十八る百五十九る百六十る百六十一る百六十二る百六十三る百六十四る百六十五る百六十六る百六十七る百六十八る百六十九る百七十る百七十一る百七十二る百七十三る百七十四る百七十五る百七十六る百七十七る百七十八る百七十九る百八十る百八十一る百八十二る百八十三る百八十四る百八十五る百八十六る百八十七る百八十八る百八十九る百九十る百九十一る百九十二る百九十三る百九十四る百九十五る百九十六る百九十七る百九十八る百九十九る百

り一疾二く三飛四行五て六僧七供八と九請十て十一返十二り十三ぬ十四又十五東十六山十七佛十八眼十九

寺一仁二照三阿四闍五梨六房七説八天九狗十女十一来十二語十三の内十四に十五其十六時十七に十八女十九

二一同二計三段四に五被六伏七奴八二九の十腕十一と十二搦十三て十四天十五縛十六よ十七無十八て十九轉二十

如一く二て三叫四ぬ五る六和七名八抄九古十本十一に十二都十三元十四求十五里十六此十七同十八云十九

中何れも併に十一月十一日古末と云ふは
高瀬より渡りしもの行なりや都次利ハ都元
里の略と聞ゆツムリとツツリに是も又畧
粒粟の義、今物の腰籠なる魚のつんぞうと云
ふは後なるづい今めりかた物と云ふは丸
りより出たまふもこはよ移りし物と云
螺と云音同し陀螺と云ふは又丸なる
双紙の草子長年中めりる物の中よはけは
ぶせしこは又鷹籠の葉おまひまひせ
これたを一事かひよおまひけいふ別
有るも

せうおまは河百首歌狂言合は池田の式を
とせし事なりと云ふはづうたを
返はる春駒の判よ云ふはこは
中かされたりと云ふは
存敬よ鑑こがし許つきこは
りたる市よ入る重くなる
てあづりし事小児に
とむマシロ見廣ゆ志き二人と
まは花に當り何ひは
くはきかたの足
本草啓蒙
北山玉
四

こころと 一代男 五十八年 地蔵のいまり
又西窟の九龍の号も秋の末より螺はくまや
くまの河 仏くまの古谷の遺まよりや
こころ帝京景物畧ニ揚柳見活抽陀螺トアルト
時候異の陀螺と漢土小つふも螺をすべりたる
ノ其の号もいこぬ末にくぬまの宛定宝曆の次
まもも命教の行りしこころ一も其の次の後よ
こころの経のまかたこぬの緒の末よりこ北
よての六返の終りむとすの時折よくそりぬ
便なる下へ今六返の年細く截て能き竹のさ

此のつるぎたり詠谷の口老小のそたりはく
ちたしめくはりよも歌者たるそいさか
いまも赤口よ宛地蔵の経の牛よ解たるまの
同くちたしめくはりよも地蔵の居れま下り地蔵
ハ俗小ぢたしめくはりよも一も是れ居の傍の傍の
人小准つこいぬも常よ身一又漢土よ空鐘と
りよまのたふこぬし後小井寄文たる六返の
おのりおやりよも利京其の声ごしと唱る
反江戸の小児のじんご六返と少安斎云墓同
の音ハ小児の弄ふたごぬも亦にけり

これと同一音たゞハ漢土ヨ借字トシテ小物ト
トキ余のよかたこぬらゝー長崎歳時記タウ
コマヲ象コマトイヘリ其ヒバキ象ノウナルニ
タトフトイヘレ下象ノ声ニルモノスクナレ又
同書ニフセウコマヲ鞭コマトイヘリコレモ折
物ノ歌唐画ニカケル馬ムチニ似タルニヤ又同
ニ類ニハントウコマ坊主コマト云ヘルアリ是
ハ博多コマノ如ク緒ヲ巻テマハストリ其圖ヲ
ミルニハントウコトハ氷ガヌ形ニ似タル故ノ
名歟其故ハ同書方言ノ中ニ氷甕ヲハントウカ

メトアリ又坊主コマハ上田クニテ四ニ下ハホ
ソク尖リタリ淺クハ後ノ車輪條ヨソク

木はちほりし

相州津久井縣少頃ハ正月見竟女木はちの申小
て小浅地廻して止りたる時又次の者抄紙
出してまわしてまひそへたるこき先の浅
小少くしてそのを海に揚げて其の鏡紙面り
まゝ重なるがれが先の者小頭紙面りまゝ
紙裏

いりの由り和名抄紙辨色立成云紙老鴉
師世間云

代男ふも難波此の巻く鳥城懐のまやうてきな
まはのゆるその雲ふも帯橋のたすうこい
よてふ知れく難波ふも鷹苑波某 家永十五
年鳥籠飛 か
ふりけりるす天飛けりるす雲とけりるいふけ
けりこそ此ふさる北長次今けりけりこそ
そのけたさるすや漢出ま此筆さるふまのけり
じ能山井いさのけりふもけりるまきふ魚やふ
ふのけりいさる糸さる 江宏 江戸三吟物の衣
あふふや古郷のいかのけり 信徳 養徳橋水波
此風ぬも 山菜のあはれ 守りぬ一角

利角今小児たし こり 水波 ま けり
ふ筆社の楷詠 あ 詠物詩送風筆唐司空曙
一カ詩二松泉鹿門夜笙窟洛濱朝マ夕唐高駢カ詩
夜靜絃声響碧空官商信任往来風後在ふ此紙
考 こ 揚子菴集五十七古人
殿閣簷後向有風卷風筆塔同風動成音自諾官商
又云玉半山有風琴詩云風鉄相敲同可鳴此乃簾
下鉄馬也今名紙寫曰風筆非也 こ 響空
於の響 唐 人の咏 物 是 多 響空
こい つ 思ふ け 懐 ふ 鳴 音 此 乃 簾

あゝに風三々云ふの装ハ其物の向ふ方知ん
て此の如きもの音知國にても此世は長崎時歳記
二月條此月ヨリ四月八日マテ市中ニテ風ヲ放
子樂云快晴ノ日ハ金毘羅山ナドへ行厨ヲ携へ
行テコレヲ放ツ風中ノ装一ナラズハラモニ劍
舞筆曹バラモニ入道ハタ奴ハタ百足ハタ蝶ハ
タ障子ハタ日本ハタアコバタカハホリハタト
ニホウハタ桐ニ鳳凰海老尻天下太平天一天上
大吉等ノ文字ヲ作ルモアツ又ツルハカシト云
事アリ硝子ヲ細末ニシテ糊ニ和テ是ヲ芋ヨマ

引ツケ日ニ乾ニ風中ニカケテ放ツ硝子ヨマト
云手元ハ常ノ芋ヨマニ互ニコレヲ以テ町人ヲ
ヘタテ谷ヲサカヒテ相カクル術ノ工拙アリヨ
マトヨマトスレアヒ遂ニキレ行ヲ負トス十日
金毘羅祭禮系後解集ハ蘇の廣也小色也沙也
キ毎當携ハ大人小児風知カ多ク膳負知年上社
日市中のはま屋丸野中小飯店知云つらハ硝子
小飯また知高ふんく大北ハ高小飯百所知費也
に此ア其風知因知多クハはらシ主と祿に
るものハとと装製ニサハ又サ小思多れぬハ

海

初

きき大 大小

いしにけりし 常也物夜 月宴 小島にけりし せい

けりし けりし せし 赤深石出の 赤茶の 女院の 娘きり

にきこえさきし 限いし 石にけりし せし

らにけりし せし けりし けりし けりし けりし

ふりふりし けりし けりし けりし けりし けりし

春宮の 石にけりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし けりし

是山 赤茶 石にけりし けりし けりし けりし

月日 けりし けりし けりし けりし けりし

小島 けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし けりし

大さ けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし けりし

首入 けりし けりし けりし けりし けりし

かへ けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし けりし

堅厚にく小い班文のり小野蘭山云本州綱目小
草部白菱葉解小根飛似扁螺とい了了白菱根不
移夕と吹らかし系師をせせ舟と云云小児を此
貫き板ふとい海へ近江しくせ舟と云云ハ膳所
世い貝ははは錢貝の云なり江戸さといたん船い
きいことと云多んいハいとい石はもも石はりり風
俗文選湖水伝伝年に大石は積船ハ耕作のたま
帝じとい行り段年にい舟の平たく堅厚に地を
多分おまひりせく貝の名は員ををるりテ其大

のきききの大あらはらはらのもおまりもこれの古
一ハ小石は水にいしし此舟はいハいといりり
ハこの或事もうははらるも又竟或は舌尖よき
さだは吸けるこの者者扇籠工随筆にニタハハ
キサゴのもし此貝は舌のまはらい吸つく此の舌
のだいて物いもねをも名け多くこいつつ説と
詠神武天皇御歌小大石小八重旬纏舟小螺
子は後を後つくく石は此降来之大重にり此
り小介又一種石は此舟云介りハ大重ハ敘理
の石多くこに似る舟ハ入子枕ハ正徳元年の
撰行也也

レ古久道公法師カ柴ヲモテ小舟ヲ作り道祖ヲ
送リレ古事ナド思ヒ出ラル必コレニヨレルニ
モアラジ河辺ノ見輩ハ自ラ舟ナトヲ玩ブナル
ヘレ南島雜話三宅島ノ糸正月十四日渡船ハ其
糸組水主ノ子共漁舟ハ組合ノ子共トムレヲ分
其舟々ノヒナ取ヲ造リ順ヲ立ラ村中家別ニ持
歩行コレヲ稼初ト云トアリコレ似タルト又
コレトハ異ナレト長壽歳時記ニ四月下旬ヨリ
市中ノ男兒端午競渡舟ノ学レテ町々ヲ廻ルニ
間程ノ竹ヲ舩ニ表レ見輩面ニ舟ヲ又リ髪ニタ

タハ紙ヲハサエ又ハ井笠ヲ著右ノ竹ノ左右ニ
取付テセロウセロウタイト同音ニヨヒアカ
子木綿ノノボリ或ハ五色ノ紙ノボリ劍バタニ
何町子供中ト書タルヲ押立太コドラヲナラシ
廻ル他町ノ子供ニ行逢バ互ニノボリヲ出シ合
セ年齢ヒトシキ同士双方ヨリ一人ツ、出テ走
リソラフ是ヲハイロシト云負方ノノボリヲ奪
取トイヘリマ一人ハイロシニ二艘セリ三艘セ
リト云一人アリセラウト云ハ此セリニテセリ合
ハシト云ナリワタニトハコレヘ来ヨト云方言

折りし極びて中めく小指達のあせ背の身いそ
こりし時糸巻のた糸糸衣と等ししなりしとせし
有六北まゝなりし言と異しよて一人のまじり
其の邦の事引あひ立たりそのゆゑに親の口
りまはりし小指のあせせしむくいと親の口
小指の食て中北てせいと云くいと一画の
因ふゆゑの中北る者めめそく一画の
み居時中小三一のゆゑの者北前北行更に
り共公まかせし指先少を教ふる小指看極其先
り小指の極の者又前の如く中に立つ人言の平
中なるもの先づの月小入り或云北我輪藏小
安至るの傳大士西音の法堂なるなりしと
又一休の極 寛文三 或人口蓮画像の極北望む
如小六の画のさて小くうびるうは黄紙の衣

法きせたりしゆひ法然の極北更なるなりし
なりしと奥よりなりし小指の法夏の新よ如
りゆらずと其阿とびりしとるかやこ阿こ北
も小児の戯と書きし阿宅私とよ芝居し
童戯の極といつる阿よなりし阿大指とつる
是極しと唄いしとたるとさうりぬと今よ
ゆりゆりし小の卒北とるやゆり
首かたわも かき
小児のゆりおあり北とよ守氏平白小指小
あきとるもあきとるを極しおさるいやうしかを

帝京景物畧二見見流火則呼之曰賊星夜不以小
兒女衣置星月下曰女怕花星照兒怕賊星照亦不
置洗濯餘水為夜游神飲馬也曰不当價如吳語云
罪過死の紅暮霞ニのト小児ハおまんハおまんハ毎ハとい
ふ黄盛ハおハはしハのハ時ハといふハ是ハ行ハとハ夕ハ何
やハけハ半ハまハいハ小ハおハうハまハしハのハ時ハハハ王ハ莽ハがハ時ハ
のハ半ハ小ハ出ハまハるハ
まハのハ黄ハ盛ハのハ昼ハ夜ハのハあハつハいハふハまハいハのハ色ハ小ハ似ハと
りハこハのハ一ハ海ハのハ消ハ命ハのハ祝ハなりハおハまハんハとハりハ小ハのハ花ハ
にハ小ハ依ハるハ女ハけハおハしハいハるハがハ先ハ世ハ又ハおハくハ海ハ

三瓶ハたハくハ丁ハ其ハ死ハのハ紅ハとハりハふハ天ハのハ紅ハなりハ惠
空ハ紀ハ州ハ降ハるハ常ハ用ハ茶ハ小ハ和ハ俗ハ呼ハ系ハ之ハ雲ハ口ハ死ハ紅ハ粉ハ
貞ハ徳ハのハ油ハ加ハ須ハ小ハ雲ハのハうハ一ハよハ湯ハやハりハ決ハらハるハ
毎ハ年ハやハてハかハのハ奴ハあハなハるハがハ紅ハ粉ハのハ氣ハ室ハおハ登ハ白ハ
帳ハ口ハ毎ハりハやハりハすハむハ入ハ口ハのハ死ハのハ時ハおハまハるハ天ハと
死ハよハりハけハりハけハりハのハ腰ハのハ阿ハ摩ハのハ女ハ母ハのハ魂ハ緒ハに
又ハ常ハ樂ハのハ安ハ摩ハのハ面ハのハ輪ハやハりハのハ鼻ハのハ左ハ右ハ小ハおハき
巴ハのハ如ハ然ハ放ハりハのハ不ハ走ハのハまハかハはハりハとハりハ守ハ郎ハ千
百ハいハつハるハ法ハ師ハのハうハおハいハ出ハ佐ハりハまハるハ之ハ粉ハもハ又ハま
りハまハるハ身ハ返ハ小ハ舟ハ大ハ北ハのハ男ハ子ハのハ出ハ生ハのハあハくハて

女子ありて是れ女体なりと云ふ事
古く所りしに又思はれ止る色を賣きめと
りて紅粉ありて顔に色を塗りて
いひてはるや鷹鷲波染ふおや小志
やあまの尾りかよつ多たも
とらふはむよりふ海へ是れ小児の
泣親の此りし事也安宅松と
る海小舟にありてやうにいふ事
此の事此は意と云ふ事又アマハ前ノア
マカツノ処ニモイヘル如ク今モ女ノ
トイヘルモアリテ女ノ頬紅トシテモ通ズヘ

之昔ノ女ハホ、ヘニサレタリ此故ニ少女椿ノ
葩ヲ頬マタ額ニモ粘^レ戯^レアリ當時ノ秋ヲ学ベ
ルに不角カ撰メル續清鑑ニ誰惚ナマレ椿ホ、
ヘニト云付合ノ句アリ又同人撰水馴棹ト云集
ニ似合カト袖トメ前ノ茄子鉄漿ト云句合ノ句
モアリ茄子ノ皮ヲ口ニ含テハク口ヌノ学ヒス
ルト今モアリ似タル戯ナリ又小児ノ京橋申橋
オマニカベニト云今モ女児ノテマリ唄ニオ
ニ京橋十ニ々申バレオツヤ十六大フリ袖ト

小一、初重のり、此曆小志、了したる、や葉式
新家集、こよに、初重、た、た、た、目小
ち、う、死、心日野、た、あ、こ、山、重、心、法、ゆ、く、ま、や
ら、る、れ、を、あ、く、ま、か、く、ひ、め、の、村、う、つ、む、を、と、し
ふ、の、山、り、を、ま、か、つ、く、ま、何、重、心、て、岩、山、ゆ、く
と、あ、葉、集、十、九、天、平、勝、宝、三、年、三、月、三、日、丙、午、忌、寸
能、麻、呂、の、館、に、宴、樂、の、時、の、分、に、積、雪、彫、成、重、巖、之
起、奇、巧、絲、毫、草、樹、之、死、腐、此、塚、久、米、朝、臣、廣、能、作、歌
一、首、奈、泥、之、故、波、秋、吟、物、守、君、完、之、電、巖、前、左、家、理
家、流、可、母、進、以、女、婦、誦、之、娘、子、歌、一、首、電、島、巖、尔、殖

有、奈、泥、之、故、波、千、世、尔、閑、奴、可、君、之、挿、頭、尔重、の、君、小、翁、也
彩、り、他、と、あ、い、い、電、の、山、の、清、少、納、云、物、の、何、と
也、能、あ、く、ま、か、つ、く、ま、何、物、の、系、志、の、此、の、中、ま、り、
ふ、と、に、電、い、と、た、く、ま、何、を、多、能、如、病、こ、小、翁、と
く、ま、の、何、に、り、い、れ、つ、い、と、お、か、く、た、何、
く、の、庭、に、は、ま、の、山、能、他、く、也、何、く、し、と、て、ま、り、
い、あ、り、て、お、か、せ、ま、に、い、い、く、あ、の、ま、り、て、他、く、
何、能、ち、何、け、人、も、千、年、人、の、く、ま、に、あ、り、に、ま、り、也
何、く、ま、り、い、あ、り、に、つ、く、ま、り、あ、く、た、く、ま、何、山
つ、く、ま、人、り、あ、く、た、く、ま、何、山、り、ま、り、い、く、ま、り、と

くろく如く横上院跡なり灯台のふりき一節
池上漬し中よ入く火と照せし
灯人多く火のよるぬ
電解てとせりぬ

電や声

安布良加須よりなるぬや
道徳行ふか
自たろし書や声電をけせり
ハ和名抄漢書音義云 瘰 瘰 瘰
中寒作瘰也と有り蜻蛉日記霜ク午マ
トテサハグモイトアハレナリ契冲云
ハ俗ニ霜バレトイフ霜ク午ノ出来ルモノハ初

霜ヲ手足ニスレバハレストイヘハニカスルヲ

マシナフトイヘリ

雪女

ゆき女俳諧懐子丸
作者 見しきぬや山のたけ
目よえぬや足もさぬの雪女
とあるゆき雪女
め各先有といど
五元集川むい
帯が束

電六乙二

電六乙二 後然年 百八 ぬきく 電た乙 乙の 乙
此と 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
電と 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
乙た 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
うた 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
るよ 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
ふか 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
たう 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
壺の 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙

ん乙の 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
電た 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
よ 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
に 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
りて 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
ノコ 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
電ヤ 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
こ 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
寛 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙
た 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙

の物雪嘉多言 慶安三年刻

親ふちのせいしはまもすいきだして雪あり

と庭に出はれはまはまあはりりりり佐夜中山

集たまれ物老丹波いささの月いづもい後山井

阿まのさき雪こん今夜いささ又古記若句

雪よ雨まじり人ざれば阿信の巻子母小来花

こき雪こんく我隠しをいづし

雪抄

雪打禁秘御抄は滝口相具衛士及所丈上殿上舎

於棟抛雪所衆作雪山この雪抛は雪のうらり雪

秋ありて山は料とてはるる犬子集雪抄や

きふうき雪花は多依安布良加瀬子修やあそ

ふきくにねはむ能指を廣くうけき雪打は佐

夜中山集ゆき篠う川子やふつ六の巻五元集

雪うちやゆりふたふ其小忌衣聯珠詩格方南

山詩自縁着得重表煖戯拾庭前雪打人源氏物語

浮舟まじりハの雪打い志きりりいのや

にぎぬりいあがりりりりりりりりりりりりり

寒垢離

寒垢離臨集は雪垢離がゆびりり水よ月もな

有知寒六リヤ後子地もあぬ人より自後
撰夫曲集釈教賣僧佗スレバ今裸ナル寒ゴリノ
身ヲヒヤニテモ錢ホレゾ思フ重至 六北ハ初
事北より行りて堪た少事あも今世乞食坊
外寒ゴリとリハ代旅歌の意持りも後二に
洛寒胡戲といハハ只寒中ハ水寒事とて
ハ唐書中宗神龍元年十一月己丑洛城南門觀漢
寒胡戲事、睿宗景雲二年十二月丁未作洛寒胡
戲この事止きたりハ玄宗開元九年十二月己亥
紫洛寒胡戲といえあ、その後この事持り

寒氷

今小兒裸體なり此かんこけりも云ハ氷氷
ひそ、昔の小兒ハおろし氷といひりハ作歌中
山集ハ白あきけき之のう歌教ういふつめり此
とおかん氷もまもるにいひり又氷氷たハ
く歌ハ鬼貫ハ獨りに柳取ハ柳の肉よめつきて
柳氷にまればもうたハ長あはれハらん屋の靴
し出ハまて何もいハあはれハ音かあめく
むろハハハ、こハこハ漢土より揚萬里ハ穉
子弄氷といハハ穉子金盃脱曉氷彩絲穿取

いとふきのハ昔よりやまのりしてきて卷二人唐
の長分小群品^{コロフセバ}仰者^{コロフスキナ}何也^{コロフスキナ}自伏君^{コロフスキナ}之^{コロフスキナ}命とある大
海^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}まの^{コロフスキナ}とく^{コロフスキナ}自^{コロフスキナ}御^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}にて^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}自^{コロフスキナ}自^{コロフスキナ}御^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}
張^{コロフスキナ}こ^{コロフスキナ}ら^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}い^{コロフスキナ}つ^{コロフスキナ}た^{コロフスキナ}れ^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}ま^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}う^{コロフスキナ}何^{コロフスキナ}む^{コロフスキナ}記^{コロフスキナ}さい^{コロフスキナ}と
い^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}仰^{コロフスキナ}も^{コロフスキナ}お^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}づ^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}ら^{コロフスキナ}ひ^{コロフスキナ}お^{コロフスキナ}く
る^{コロフスキナ}さ^{コロフスキナ}ぬ^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}お^{コロフスキナ}ぢ^{コロフスキナ}れ^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}古^{コロフスキナ}く^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}お^{コロフスキナ}ぢ^{コロフスキナ}ら^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}や^{コロフスキナ}名^{コロフスキナ}付
て^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}し^{コロフスキナ}さ^{コロフスキナ}て^{コロフスキナ}上^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}出^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}向^{コロフスキナ}ハ^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}
う^{コロフスキナ}つ^{コロフスキナ}く^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}生^{コロフスキナ}出^{コロフスキナ}て^{コロフスキナ}つ^{コロフスキナ}く^{コロフスキナ}め^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}云^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}備^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}た^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}や^{コロフスキナ}あ^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}
ん^{コロフスキナ}十^{コロフスキナ}刻^{コロフスキナ}抄^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}ハ^{コロフスキナ}社^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}向^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}ち^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}つ^{コロフスキナ}く^{コロフスキナ}
し^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}仰^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}出^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}う^{コロフスキナ}こ^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}減^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}の

こ^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}仰^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}出^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}う^{コロフスキナ}こ^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}減^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}の
ハ^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}向^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}あ^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}刻^{コロフスキナ}抄^{コロフスキナ}ハ^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}仰^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}
の^{コロフスキナ}う^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}人^{コロフスキナ}張^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}刻^{コロフスキナ}抄^{コロフスキナ}ハ^{コロフスキナ}一^{コロフスキナ}伏^{コロフスキナ}三^{コロフスキナ}仰^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}出^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}う^{コロフスキナ}こ^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}減^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}ふ^{コロフスキナ}の
つ^{コロフスキナ}く^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}生^{コロフスキナ}出^{コロフスキナ}て^{コロフスキナ}つ^{コロフスキナ}く^{コロフスキナ}め^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}云^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}備^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}た^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}や^{コロフスキナ}あ^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}
ハ^{コロフスキナ}知^{コロフスキナ}か^{コロフスキナ}ま^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}また^{コロフスキナ}十^{コロフスキナ}刻^{コロフスキナ}抄^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}文^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}れ^{コロフスキナ}う^{コロフスキナ}川^{コロフスキナ}む^{コロフスキナ}き^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}い
と^{コロフスキナ}何^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}神^{コロフスキナ}世^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}不^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}た^{コロフスキナ}う^{コロフスキナ}何^{コロフスキナ}む^{コロフスキナ}き^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}い^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}よ^{コロフスキナ}め^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}も
塩^{コロフスキナ}震^{コロフスキナ}抄^{コロフスキナ}ハ^{コロフスキナ}元^{コロフスキナ}市^{コロフスキナ}養^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}い^{コロフスキナ}ひ^{コロフスキナ}ま^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}遊^{コロフスキナ}学^{コロフスキナ}性^{コロフスキナ}未^{コロフスキナ}に^{コロフスキナ}無^{コロフスキナ}市^{コロフスキナ}と
出^{コロフスキナ}て^{コロフスキナ}つ^{コロフスキナ}く^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}生^{コロフスキナ}出^{コロフスキナ}て^{コロフスキナ}つ^{コロフスキナ}く^{コロフスキナ}め^{コロフスキナ}の^{コロフスキナ}云^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}備^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}た^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}や^{コロフスキナ}あ^{コロフスキナ}る^{コロフスキナ}
養^{コロフスキナ}ハ^{コロフスキナ}政^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}也^{コロフスキナ}ゆ^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}も^{コロフスキナ}い^{コロフスキナ}ひ^{コロフスキナ}ま^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}遊^{コロフスキナ}学^{コロフスキナ}性^{コロフスキナ}未^{コロフスキナ}に^{コロフスキナ}無^{コロフスキナ}市^{コロフスキナ}と
お^{コロフスキナ}ぢ^{コロフスキナ}れ^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}こ^{コロフスキナ}を^{コロフスキナ}た^{コロフスキナ}り^{コロフスキナ}骨^{コロフスキナ}子^{コロフスキナ}に^{コロフスキナ}い^{コロフスキナ}何^{コロフスキナ}む^{コロフスキナ}き^{コロフスキナ}は^{コロフスキナ}い^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}よ^{コロフスキナ}め^{コロフスキナ}と^{コロフスキナ}も
四三

海一々此を双糸糸うつとりふがごとく打とりふ
そのとこゆきて万葉の法にのらふよ用ひたる
小音は粘りたるにや実の月をさへく養の目け
衣とゆゆ大詠よりふ其の用する市の養計衣
なれども二つふく二あふむるたはこちとい
いなるもくす粘り其の法は物と教りゆり
づく是標痛^{カリウチ}なりとをさす主のをかりとこち三は
其の神^{トヤ}一と遊し和刻系よ云貞徳の書小法くよ
とらぬ左小説の市はさつきまの法と法に
ふれ甲のうらふと竹はなりとおもえはなると何

多に響くもく世はけいとりふ市と六本しとん
一たりとたは養系に一伏三向と大詠と小の
も世帯の養りやけいとりふの法と何と天
小児或小宛一とゆふる法もにすつけぬつく
こてな歩と定むるあり又いち何との者を一
といなり又常とをさるげしとりふ衣もけ一
の粘りたる法も^ト宛一^トなり^トとい
りあ一とりふと今の市と^ト粘り^ト何と
ふふつきとゆふは竹と^ト法と^ト小子の甲小裁
たう竹は裏と^ト法と^ト以実と^トにさる

八田合のりこまのり 伏古此字子けり 後此に
に此く名也 櫻陰比事町人の一送り 白衣の
如き為帽子の落て 後此の心男此のうにさかじ
云 乙州の世色 一をり 分帯後子の 此書と志能
此の先細き竹杖紙の紙此のそり 此の此を
此のに聲此此此此の 此の 此の 此の 此の 此の
有と是を此の久の 此書 此の 此の 此の 此の
此れと此此此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
の中 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 再

糸田合 一休と云 草子に 女のみ 此云に 青竹の枝
少と した 此の 万字 此の あり 此の 此の 此の 此の
の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
したるが 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
八田 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の

合点首

合点首 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の

人形こけいよりより了りょう一代女いちだいな貞享けいこう三さん卷まき六む衣い敷敷と首くびのの名な

別わかは遠とほの合あ点てん頭かぶの如ごとくく子こ供けの弄あそぶる衣い敷敷の用もちふ

此こは六む玉たま川がわ八はち月げつ西せい人にん形がたのの名な五ご月げつ

人形こけいのの名な又また小こきき能のくくひひとと云いふふのの行ゆき

首くびのの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき岸かた不ふ知ち

後のち太た教きょう 唐たう人にん笛ふえ

所ところに教きょう唐たう人にん笛ふえ諸しよ物ぶつ大だい禮らい 貞享けいこう三さん卷まき六む衣い敷敷と首くびのの名な

此こは人の集あつまる所ところ也なり 後のち太た教きょう唐たう人にん笛ふえのの名な

竹馬たけうまのの名な又また小こきき能のくくひひとと云いふふのの行ゆき

鬼おに夜よ違ちがひひのの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

風車かぜぐるまのの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

子このの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

子このの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

子このの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

子このの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

子このの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

子このの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

子このの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

子このの名な又また見みるるとと云いふふのの行ゆき

せぬうけり松の葉落部丹前八懐詰出端引てり
こころやいそひなすけり物作りしこのかた
やめりありふあそび信びし世むま心山あふ世
あはれ小風車ゆきたふ小やうう山うう多多少
に帰る友名うまたう犬の子をうや蓮の
やふた山う具う江戸名物う難日谷風車
新巻や給仕うゆき風車う六北唯う七奉う作
たう草根集寄車意年二トレハソナタヨリ吹
風車うクリアナキニルニトソ見ム後奈良院
御孫何曾小風車の謎嵐ハ山あきて軒のハハ小

行帝京景物畧割秣楷二寸錯互貼方紙其両端
紙各紅緑中孔以細竹横安秣竿上迎風張而疾趨
則搏如輪紅緑渾如暈曰風車路徳史孩児詩の相
散放風旋う云う六色う持う

張子う八懐詰出端引てり
くろく雁分府志市紙うく人紙う多う鞆うの紙う糸う下う諸
品うのう摺う花う紙う紙う少うてう思うぬうくうくうらうくうよう
ハ脱砂うりう泥砂うにう其うのうかうをう紙う紙う石う石う
くう文う運う小う袋う之う孔う張う脱うくういう年う西う窟うくう大
脱う七う人う紙う紙うとうりう茶う師う子う留う紙うぬうきうのう年う又うハうぬ

んこくはりの春巻右教をたぬや其神の是を
そやたすしは孫の心
今このころ
この男女の大名にまむしは孫の心
まじ宝暦に孫の心まむしは孫の心
る鹿の心まむしは孫の心
出づる心まむしは孫の心

獅子笛

西宮大瀬獅子笛 上小六れと孫の用る鹿笛小

六あはは頭は獅子孫の用る笛

鶯笛

鶯笛は犬子孫の用る笛

誰身の上を孫の用る笛

はさくはは頭は獅子孫の用る笛

猿笛

猿笛は犬子孫の用る笛

子供の名小ソふりや

雲雀笛

雲雀笛は犬子孫の用る笛

代男一小児孫の用る笛

ポニピン

江戸ニテハホコニト云執苑甘涉ニ響葫芦小
ニヒニト出タリ一名倒掖氣下云帝京景物畧云
琉璃云々有啣而嘘吸者大声咏々小声啖々曰倒
掖氣。口下舊聞小倚晴窓難鈔引て口流溜原
為燒殿尾之用尾有黃碧二掖殿尾之外所製口魚
瓶口流溜片口胡芦曰響胡芦小児口銜嘘吸成声
俗名倒掖氣。傳家宝ニ集料物不可与児ニソ小條
小年節内外滿街都有賣料汁不動并料汁流溜喇
叭但此等要物最薄最脆遍地小児每喜吹頑若一

吹破吸入喉嚨無藥能救其破片極是鋼利入目即
瞎入腹腸断料絲燈上料絲害亦同此全在父兄切
戒勿ハと其の喇叭ハホニヒニトハ異作ハ料絲
ハ切ハハと其の管ハハ連條ハハ筭廊偶筆京師
琉璃廠有賣倒掖氣者劉公勇秋部體仁買得一枚
於馬上弄之笑謂汪苜文民部琬曰此事可入彈章

彈ハ後

賦ハ後

もじハ様古き前ハ月ハ書名
子ハ夜に河海海之叩ハ後ハ大屯今ハ又ハ賦ハ後
ハ言と五月賦の下ハ月ハ後ハ振ハりハさハ致ハしハ定ハてハ河

空間處有五百獼猴遊行人間有一尼拘類樹々下
井々有月影猴至見已語諸伴言月死落井當共出
之令諸世間破於暗冥諸猴言云何能出至云我知
出法我捉樹枝汝捉我尾展將相連乃可出之諸猴
皆從纒欲至水猴重枝弱枝折墮井中嗚呼是乃
塩尻ニ五色線ヲ引テ曰謝靈運遊名山觀掛猿下
飲百臂相連云々世小猿の子孫は速りて水中
の月影はさらしきものなりは必無くは世小
や世一月影はさらしきものなりは必無くは世小
るや見侍りしと速りて水に沈み別命を乞ふ

うたふと川小公侍て是く始り大哉

米搥さる

米搥後續五元集凍たるとまゝに流し鞍のうへに
よび下流小猿の米つき江戸二色夏を流赤いふ
んじり云とつよと人よ流りて米はつとけり
隻穢穢と米を流し乳貫ひの流子とや市に米
つき後と小猿齋 十卷

水挽を流

分水のうへに小猿は流し水少く云
く磧と名をて天孫流小石人の他もる 破見の詩

の口といつて怖ろしき女の面状般若と云ふ
般若心経頌鈔云翻般若云智慧其體也清淨不受
諸妄染云々一く智慧と云ふ所の梵語に鬼女
の面状と云ふや此の言の轉りたる抄る
べし其のまゝと謡曲より玉葵上小怨具行者の加
待も誦文を聞てありおまゝに般若抄やと
有大般若波羅密多經第五百七十八般若理趣分
曰菩薩摩訶薩摧伏一切魔怨と云ゆ般若の声よ
怕もたる怨具の著る面と云うて般若と云ふ
はよ又後集金春の家よ傳來に鬼女の古面
り般若と云ふにソレは右の製造とある般若抄の
南都の僧の鬼女の面状と云ふて鬼女の面状と云ふや
ミソと云ふ又曰家よ三光と云ふ厨の面あり
こけも三光と云ふて三井寺の僧の鬼女の面と云ふ然
らば老翁の面状三光と云ふて其の角
の錦繡被は鬼女の面の般若あり女と云ふ古集
より角の面状黒塚の鬼女の面と云ふおもしろい
侍もかへ一念の鬼女と云ふてあり
因西の面状と云ふて源助と云ふてあり
く角の面状と云ふて時と云ふてあり

り般若と云ふにソレは右の製造とある般若抄の
南都の僧の鬼女の面状と云ふて鬼女の面状と云ふや
ミソと云ふ又曰家よ三光と云ふ厨の面あり
こけも三光と云ふて三井寺の僧の鬼女の面と云ふ然
らば老翁の面状三光と云ふて其の角
の錦繡被は鬼女の面の般若あり女と云ふ古集
より角の面状黒塚の鬼女の面と云ふおもしろい
侍もかへ一念の鬼女と云ふてあり
因西の面状と云ふて源助と云ふてあり
く角の面状と云ふて時と云ふてあり

之形もんや此のゆきかきとろふか誠とといふ
糸盛の端ひし思ひやうたるや此飛花をく西風
の物まきふのゆきぬま隊のほろりきき雪女
共角 蹴り常同り五洲白草は足踏 沾蓬云く行
源助は江戸麻子小面折り比谷一町月出月源助
三出や 其事いつの頃
え祓中の妹は 諸藝大平記四張
貫ノ般若ノ面雨ニウタレニまみルヤウニ天晴
芝居ノミセ物ニ出ニタラハ直打ノアル男 云々
耳袋ニ金剛太夫ニ鼻金剛トイハル面アリ是ハ
古キ仁王ノ顔ヲ面ニ拵へヌルナリ其太夫ハコ

レガ崇リニヤ鼻ヲ損ニケルトカヤ右ノ面ハ京
都ノ一古寺ニ納メオキ代替リニ一度コレヲ拜
スルトナム

乙御前の面

今おとくせりハ多振の我ハこころを大まき
世り山谷集四休の語ハ内三平ニ満過即休ニ何
ハ休三平兩の頬と鼻とソハニ満ハ顔と顯トに
くし所おれ事ハこころハ世説古くはハぬれ
張り 高 平ハ心安らハたりハ満ハたりハぬれ
きハ三と二ハ大教をソハハナリ

大ナル毛ノ色ノサマクナル毛ノ種々有リ胸等
用元禄五年五文ノ面張貫ノ槌ヒトツニテトイヘル
ハ大黒ノ面ノハリ又キレ

志ノ吹
屠龍工随筆ノ余意の英ハ口の尖ラたニ面々
漁倉雀ノ岡ノ峰後ノ海ノ行ラたニ志
不吹と名付テ面行ノ是と考ヒテ志ノものと
りハハ、といハル志ノハ小ぢりニシテ
潮の干鴈小行テ口を用テ時水ノ如ク
潮ハ小く假面ノ志ノハ義ハ志ノハ北

ノ其ノ志ハ謀リニシテ一ノ其ノノ喘ク面ノハ
ノ其ノ志ハ鷹筑波集ニ人見見ノ志ノハ
ノ其ノ志ハ三節月ノ根ノ志ノハ

友子人形

一代男 小笠原サト 芥子人形
雀籠ハ志ノ揚一ノ志ノハ府志云市個人施衣裳
小者詔芥子人形芥子人形至小者云々五元集菓子
盒ニテ人形ヤ桃ノ卷コレ三月七ナノ旬ノ申

ニアリ

西書・古今天の土人形

西宮置土産 三 浅草寺町の横筋張りの内の子元
はくし 藤屋あまたる宿の棚小小葉姿をと春
板出して玉人歌の細工也 多し心亭之詩人歌
小葉姿は先花女として帯をせぬし詩は
詠のこゝろをいへんさゝ人のおろしきさたると
いふはを文よ一ツの資その外無記ふ山吟味其
まは七十四歳に資と記のせんきと知ひる上
所々今も所々始り被きてまのりたる人歌あり
一し日一小時の歌は所々置きたる様 今も所

スマフ人歌
今熊卜金太爺ノスマフ人歌ウス板ヲキリヌキ
テ作レルモノアリ江戸ニ色ニ其製ノスマフ人
歌アリニツトモ二人歌ノ躰同クホ、カフリヲ
赤ク彩リタリイト藤相ノ作りト云ニ狂哥カチ
モスマヒマケモスマイノ木偶坊勝負ハ入ノ手
ノウケニアリスマイノ舞ヲキリヌキテ後ニツ
ケギヲホリクサキタルヲ貼ツクテ立ツヤウニ
ニテニツ向ハセ息ヲツキテ倒シ勝負ヲ云ルモ
ノアリ板ニテ作レルトイッレ先ナルカコレモ

コレモ古キモノト云々相撲大全ノ叙ニ予少時
有一戯具取見之摺疊繭紙聯剪為鼎形折如人字
乃細觀之則塗鴉其首而為髻絲飾其腰以為幀各
紀其字号宛然兩人將相撲之貌也其戲法裝之席
上戲者亦相對曲折偻尖其口喘氣息徐々一存
吹起未則盤施歌斜暫時爭競而仆得其上者為勝
而呼號宝曆 癸未
西宮大禮ノ肩車に乘て懐中具其名号金平
と賜り居たり切合とてまゝに於て飛人

金平人形 飛人形

此又ハ深分其多哉云々土俵が淨きりに金平
の事始れり也 他者ハ因法を悟和泉右史大和を
かゝりて大よ形ハ是也 世々強き事外金平
ニハ多北一枚紙と双紙ふりに出たり今も男
先々女子と金平ニハ 又深分心々固き
牛膏外黄六玉川十篇 金平ハ女ハ何てハ
今時ハ小遊女歳旦盃や今ハ温政集
又土俵草摺引ハ鬼外黄の子けさハ
らたハ金平ハ飛人形ハ竹の串と骨茶ハ聆り得
描金画譜ハ是也

削り花

古今集十物名二条の右春宮御之御下と申
 當時小めどふり所り御下させり多路すませ
 法心文金花の本よあふささめせり咲よ
 けりすに文金六のこけり侍りうる真義抄小春
 こりよ本心ゆい集めくそ色にたづり花はさ
 事といふも春の和衣抄女止と所り史記亀策
 傳ゆいんくくを莖物に削り花ハ本心事
 づりか多てあし御下く死花式図書寮金銅花
 瓶二口削り花二左右各違一枚之を佛名の所り削

り花供養よ侍ふる多くこれ其の引物と
 餘林抄よ妻出夏山雜談云今も西園池
 みてハ春小能く御下り神仏小さ下り
 多といつ西武独吟常盤の雲の如く甲乙と
 や庭碓たいのまのめハ削り花宮承の御下画
 削り花と云ふ海より御下り早の意何く
 きの春より栗林花蔭つりも多し
 餘花新出の細工
 宗長紀行下巻 冬の花の一里ん二りんか長くと
 さ死く白ふく其所のまふりくり花のまに正
 月の夜月鏡花の事と云ふにさ死たるふさの

リテ小室トトナヘテ賣子室ノ各詮ヲトルナリ
ハセハ漢名餼ナリ後世米花トモ李婁トモ云明
ノ李翊カ戒菴漫筆ニ索婁ノ詩アリ東入吳門十
万家々々爆穀ト年占ヒ丁ニ三テルハセヲ兒女
ハ花ニ作りテカニサニトスルナルヘニ華就鍋
抛下黄金粟轉手翻成白玉花紅粉佳人占喜事白
頭老叟間生涯曉未粧飾諸兒女數片梅花挿髻斜
コレ吳中ノ風俗ニテ上元ノ夜ニアルナリ

五色網

江戸砂子駒込家吉社の席菅下片産ト云ク内

糸網ノ丹前紙 五卷娘そん子まがよハお色紙
あ之紙種一併皆新ノ紙土産物賣と歳々にはいと
あふく母よ春紙をいふく 又金租をい入
て小き網の所ノ大色と名異とて子花ハあ
福と松の葉に何之長きよりハ小色有この所ハ
子供てかしまとく舟の所て是紙まよ上り所
下所所みせのま紙引く帯ておいくく子供
若也子古一巾帯紙川と帯紙一とんせの又
くく川と帯紙多たる網紙お色小色まよ又
多紙と帯紙いたが子の紙や々々又多一とりのハ

やうふんこせ福うい 宿願後世願よや又多事と
りふ若鏡の緒よ五分の細
事行りしとる

蒲室の令

言んぎの令伽羅女の宝永の冊よし其中小伊藤
丹地未社一不強一角の福を達肝の始一玉
の蒲野きえんしりふ思ふ後古くしりし
一宝永 世祝故事苑に正月の祝ひりし云ふ儀子
及令衣の包み多し其買に云一りふ今の玉ふて
他もろ百兩のりみ行

一文長刀

一代男 四行のゆはを父賣れりしりふたつ
りりみはたしり

浮鳥

浮鳥宋人丁用晦、芝田録、煬帝在江都代王留
守長安郡盜賊蜂起有獻計者刺木鵝繫詔于頸致
之渭汭冀開東救兵至日放百十順流而下竟無救
至、東京夢華録、以黃鴨鑄為鳧雁鴛鴦鷄鶩
龜魚之類彩画金縷謂之水上浮、物理小識、
一戲科斗樟腦黃蠟和勻漆墨投水中作科斗自然
走動但欲潔淨油午止之帚住 今兒女の心いと
かんたんに水と貯

にさしそ末の初に此を新市におくけり
人形紙指の先と立されおりにてつる合て
立し世もぶんのとるやうにんゆれおとる
りとしふとにやおんときおんこけりしその
あそ社お共二節としふ形人の笠井上にてはて
して集をその終りてこいり後承り終云
何としふそのよ出をうん今差く深と承り
水人形の通称あり流旅り祀貞享四年刻伊勢所い
の山お移おまうと終りしよとこれ世承の承り
市々山内儀む世先たりしとしい又雅冊府志よ

乞人尚長惣謂与次郎云々四人或六人入人家庭
踊躍歌手唱祝語六の友よた、此の与次郎と云
伴の随承よ形人の笠井上に承りて承りしこ
りるハ進時のとくす一あれが世も友よ興承り
こりしりハ何れに承りてとるす母よ似を
海故よ名の節し何れこの人形紙指女と後先
よ承りて宝お七年板本伽羅女としふ菓子よ何
り又笠井上よ人形興承りて承りて承りて承りて西
窟、貞享中け冊子よ承りて承りて承りて承りて
よ用占て其條下よりし併せし一し笈紙掃いた

モキノ座ニ連リシサへ珍ラシキ事ニイヒタリ
ニ今ハ綾錦金襴ノ衣服キラヒヤカニ真紅紫
ノ組系ヲ帶トシ猩々緋羅紗ノ蒲團ニ象牙玳瑁
ノ杖ヲツキ一曲舞ニ錦ノ袂ヲ翻セハ満座頤ヲ
解テ喜ヒ中畧スガ、キ永代橋何クレノ曲ニ長
シタルモノハ賞羨セテレテ時代時繪ノ箱ノ中
ニ豊ニ眠リ云々アリスガ、キ獨樂ノ舞ヲ中ニ
スガ、キ幾遍彈永代橋モ松ノ葉ニ載タル端唄
ノ名ニコレモ同ク其マフ中ニ彈ウタハル、間
アルナリ小兒ノ翫弄ノニハ非ズ酒席ナドノ

與ニ舞シ、ナリトイヘリ然ラバ手車ハ土ニテ
作レルニ習ヒテ錢ホマモ土ニテ作レルトナ
リシカ今ノハ回文錢ノ形ナレバイト近キ制ト
シラル下総千葉ノ辺ニハ若キ者共日待ナドノ
遊ヒニ各錢ホマヲ作りテモチヨリコレヲ舞ニ
テ少シニテモ永クマウヲ勝トニ戯ル、長サキ
ナトニモ錢ホマハ錢ヲ五六文カサ子タル也

きやこん

唐籠工随筆奥女宸心ゆゑ所の条よ黄笛行り其
め於今女のさかんぼしりやに二股よ針め

河や妙舟人紙

出たふふの紙は後以中伏着たふ之紙江戸二年
不出ふは是は祿の侍少気も時代を志す海軍も
河心折寄小半函名告之や又悪女物この人
紙対小舟あや小や河や妙やの巻ふむ少を頼
女画小股布と出下
かきう原紙

草虫

大屯小江戸二年小舟かを巻原紙
草むしり同草子に出紙もそ他うたの四よ土紙

花光て入破たす竹めう一紙はらハ紙是舟神子
花は後のも

江戶橋巻
海はづま

華光知夜和光 上巻の院の山草草中ぬあづま
花は後のも
一さ世流小澤氏物語 巻が 玉わつりれさゆ物い
ふ草草のつきらうりふめ物あふたふくらうに
て紙めうの北の心まうのふらうたわのふを
今知くうのふ一紙は紙中し巻あふさくふく
らうふう川へさす法古一と巻巻よたしくた

何れ川きかうんきく井戸の岩河さひの流き木
小卵と生つ帯面外西を海ありつきて呼小女曰
小倉の湯にそ色黄たつ海酢取ひて是は湯で
蘇くをきし江戸の安房より出たてて
安房にけり減りてつて呼小女曰
九女をためて東国よあるきよのたつに北在り
おのそ敬の漂きよとたつてありや北
物うゝる名ある故に海後皆北に所ありと
誤きし海ありつきて長螺の所なり其外ハ秋玉
螺より大なりて長一因ハ紅螺アカニシと似たり賜幸請

あり故幸にけり又夜あるきよのりハ小児在
啼の児と用たり本朝食禮よて海ありつきて
江戸近き所ハ飛小一丸ありは如雲能登り
来きりあり長刀ありつきてハ紅螺アカニシ
此所なり

篠船

廿、ノ葉ニテ作ル舟ハ夫木抄源仲正ウナ井コ
カ流レニウクル笹舟ノ泊リハ冬ノ氷ナリケリ
詞林采葉抄ニ神無月ヲハ出雲國ニハ神在月ト
モ神月トモ申也我朝ノ諸神参集リ給フ故ニ其

ものうゝ一筆腕の尻杖補し得る

凡戦 核柿

凡さし是も同画卷上凡多多く英一も小刀杖
たる男核子母上凡多し其うむむと其多し
居るもの一人所し其多し男心漢土の凡戦の類
し五雜組の錢氏子弟取雲上凡各言子之的数割
之以觀勝負謂之凡戦 子の数多し其多し其多し
下卷 評道独吟卷の雷七八所のあたる多し凡食
勝て劫之とて其多し 其多し其多し其多し其多し
ふとの氏廣東新語 卷九 廣州兒童有賭蔗闘柑之

戲蔗以刀自尾至首破之不偏一黍又一破直至蔗
首者為勝柑以核多為勝亦、に小児等と密柑の
核の数多しといて當否を論むこれをよておる
小凡核柑核多し数多く煩ハしき法いとハ
で戦ふは異國の人其多し其多し其多し其多し
けんといきく其多し以てよし其多し其多し其多し
和衣保曾知と其多し其多し其多し其多し其多し
其多し其多し其多し其多し其多し其多し其多し
脱る其多し其多し其多し其多し其多し其多し其多し
産多し其多し其多し其多し其多し其多し其多し其多し

此ふと然ふと好む、
懐ふと、清慎公は集は女所、
ちかむ心つよの、
むみ、
ん、
や、
このを又別種、

豆奴 葱ヲ吹

奈文カタリノ山伏一余ト云モノ、作ト云西行
東下リ照降町ノ段カ、九処へ向フヨリ深ア

カサニテ評判ノ豆奴アタマモ豆ナラオ井ドモ
豆ヒヤウバンノ豆奴トアリ高輪ノ処ニクテラ
ノ上リニトヲイヘルハ寛政十年戊午五月朔日
ノト、葱吹東坡被酒獨行詩ニ徳角黎家三小
音口次葱葉送迎蒜

菓物の修籠

廣東新語廣列時序の條八月十五之夕兒童燃_ニ番
塔燈持_レ柚火踏_テ於_レ道曰、灑_サ樂_ラ仔灑_サ樂_ラ兒無_レ昨_ノ糜_マ塔
累_レ碎_レ瓦_ヲ為_レ之象_ト蒼塔者其燈多象光塔者其燈少_ニ柚
火者以_レ紅柚皮彫_テ鏤_テ人物花草中置_一琉璃盞朱光

沖小舟三つありしと云葉 廿上徳國活人歌爾波
系加徳阿須波乃可美尔古志波依之阿例波伴波
波年加倍理久麻位尔 小葉とく神歌とく 古事
記大牟神の山子月内上庭津口神次上阿例波神
云く河上本居氏云當昔氏家の庭上寛神作
其上北阿須波神と云葉りこと知れ末二白
味味上波河波神の已れ家の由は河
て河前波神の家の葉も知伴波いり行む
とく此等 於葉バ何國より家ことと云葉ること
ありきと云葉り 昔といふは海より来たこと
有ハ己の庭よりいりし

何の神と云ぬ 世神鹿島上葉立の社より世事
候上世神上は鏡と云いけりいりし候上候
者記はつとまはしし世俗教胎して居りしこの
是凡し和訓葉上鹿島立と云りし是より出
とく麻島本郷と云えにまじりて本社より記する候
ありしと云いりしと云葉りし出立時記と云ふ
少中政百葉 廿河原上候本記可志麻能可舞字伴能
利都し候本良美久候尔尔候波依候と云候と云
一たり候麻島立の事初 其葉抄と云葉りしと云
多り候波集薪旅部上救済法師と云と云の候

乃より女村に海立

返送 松上胡椒

旅よりかしのあの人知むしよ出てとふくは

さくひきりふりし都人の所へ返すを出たりし

所志、いしり少き旨物語卷廿信濃守に成り

し人始て其困より下りたりし返向への饗といた

り奉北のよりいふよ一事の奉せりて守のりり

給ふ返向への二奉送たの舊酒に胡椒と濃く摺

入る在廳の官人靴子を返す守の所業よ奉て奉

送は守其酒と食と奉定むる也 又朝野群載七

二回著條の

中山の境と所り大色酒返すかひに氷をりさ

て胡椒と巾着身より奉り祝ふたのりり

うもは世と古記よりいふよ一と大幣に別と

引きりし小奉りし志のふりりよ奉りし

みはしり名まはまのりり物と奉りて

小奉りし事ハかきまの意ハたふしき軍

むらひといひしこも有深氏物語巻五より

出向むりし元思ひ脱たぬし

大の如き

ぬき給是茶籠上扱一まうり多敷人のりりぬ

可嘆記 社致紙正保元 昔深生の名宗あり花は

り小いさふもれ善光寺といふ武蔵地の色

さ海ふりし深山極致したのよみ咲きたる

てありらの人々にきこく家業ふんくまうこ

嘗のりし花さふく山うたふつまふつのみ声き

くま心宿く 善山善光寺ハ谷中ノ行ハ

さし世の色とハ 谷中ハ

や是又上山おハ 川ハ善光寺ハ

葉一本の花ハ 東殿山 谷中感應寺 法華院 芝大餅 深谷

和南回性寺 谷中法恩寺 大の村東殿山の亦ハ花えの

ん多く出たり 花さてむう の花えれさ

汝ハ守氏千向に 花は

り 花は

ら 花は

花 花は

と 花は

の 花は

画 花は

愛 花は

繪 花は

由 花は

心願も待らんとし庭の草も押草板のつらき北の
や元いとも山の白蓮奇花もたゞとや厚き心
也い私の葉も我も小北川捨投りおんこい
海女歌よんをの流よいやたつき先もよふよ
さう一のふさぎさてとれ乃希の月ちやのゆ
小川のほとり先もやふふさうさうさう
れさされうさう女幕もれ 天和貞享の流も後
ふし流のきし
さうおれをさう一乃松よハ何でその里人の
さうさうさうさうさうさうさうさう
た被ふよこさう さう女さうさうさうさう
ゆり
ゆいさうさうさうさうさうさう さう帯
の流も

花よよ出さし西宮諸国咄よなうさう 後在
流
のさうさうさうさう さう衣裳も
さう
さう上北のおよさうさう さう衣裳も
さう
よは小奇海しりの女中姿さう この小祀も
さう
さう外よさうさう 旅神海よむし
さう
のさうさうさうさう きたち京よめ
さう
衣裳幕衣^{キヌ}けさうさう 勢道通瀬よ
さう
恩院の馬場さう 下河原安井の月
さう
主の庭さうさう さうさう
さう
つさうさうさう さうさう
さう
小たさうさう さうさう
さう

後く山免に久しめ接取を市に都
其表の十一に^{エラ}市後こき^{エラ}後^{エラ}市に都
のちけけ^{エラ}此^{エラ}麻^{エラ}不^{エラ}霽^{エラ}さ^{エラ}の^{エラ}虹^{エラ}足^{エラ}拍^{エラ}子^{エラ}の^{エラ}
海^{エラ}の^{エラ}雲^{エラ}の^{エラ}雷^{エラ}の^{エラ}雷^{エラ}の^{エラ}雷^{エラ}の^{エラ}雷^{エラ}
く^{エラ}幕^{エラ}の^{エラ}幕^{エラ}の^{エラ}幕^{エラ}の^{エラ}幕^{エラ}の^{エラ}幕^{エラ}
色^{エラ}の^{エラ}衣^{エラ}の^{エラ}衣^{エラ}の^{エラ}衣^{エラ}の^{エラ}衣^{エラ}の^{エラ}衣^{エラ}
士^{エラ}女^{エラ}春^{エラ}の^{エラ}春^{エラ}の^{エラ}春^{エラ}の^{エラ}春^{エラ}の^{エラ}春^{エラ}
了^{エラ}の^{エラ}夜^{エラ}の^{エラ}夜^{エラ}の^{エラ}夜^{エラ}の^{エラ}夜^{エラ}の^{エラ}夜^{エラ}
士^{エラ}女^{エラ}遊^{エラ}春^{エラ}野^{エラ}步^{エラ}過^{エラ}名^{エラ}花^{エラ}則^{エラ}設^{エラ}席^{エラ}藉^{エラ}草^{エラ}以^{エラ}紅^{エラ}裙^{エラ}遠^{エラ}相^{エラ}掩^{エラ}
掛^{エラ}以^{エラ}為^{エラ}宴^{エラ}帷^{エラ}其^{エラ}奢^{エラ}逸^{エラ}如^{エラ}此^{エラ}也^{エラ}

く^{エラ}新^{エラ}の^{エラ}新^{エラ}の^{エラ}新^{エラ}の^{エラ}新^{エラ}の^{エラ}新^{エラ}
北^{エラ}の^{エラ}北^{エラ}の^{エラ}北^{エラ}の^{エラ}北^{エラ}の^{エラ}北^{エラ}
接^{エラ}の^{エラ}接^{エラ}の^{エラ}接^{エラ}の^{エラ}接^{エラ}の^{エラ}接^{エラ}
元^{エラ}祿^{エラ}十^{エラ}年^{エラ}共^{エラ}仕^{エラ}似^{エラ}也^{エラ}如^{エラ}是^{エラ}也^{エラ}
角^{エラ}の^{エラ}角^{エラ}の^{エラ}角^{エラ}の^{エラ}角^{エラ}の^{エラ}角^{エラ}
五^{エラ}十^{エラ}年^{エラ}未^{エラ}梅^{エラ}花^{エラ}盛^{エラ}也^{エラ}
明^{エラ}和^{エラ}七^{エラ}年^{エラ}娛^{エラ}息^{エラ}齊^{エラ}詩^{エラ}文^{エラ}集^{エラ}東^{エラ}都^{エラ}曲^{エラ}屋^{エラ}船^{エラ}強^{エラ}飲^{エラ}略^{エラ}
上^{エラ}野^{エラ}兼^{エラ}飛^{エラ}鳥^{エラ}花^{エラ}開^{エラ}日^{エラ}暮^{エラ}里^{エラ}三^{エラ}絃^{エラ}茶^{エラ}辨^{エラ}當^{エラ}多^{エラ}有^{エラ}幕^{エラ}之^{エラ}裏^{エラ}

諸遊下撫本田自風流日暮沈暗人猶潛飛鳥卷閑
心弥浮日暮飛鳥競繁華春信文調画花奢年季
野帝長歌矣道理南風是唐茹飛鳥山江戶砂子
里ハ新田村あり日暮里書此よりありあり大のお
墨水詩ありありありありありありありありありありありあり
此常ありありありありありありありありありありありありあり
二名所ト云條上野山ヲホメテ日光ニハ莊嚴才
サレタレト池ハ廣汎ヨリウツクニ遠樹高閣風
景ワキ出タラシヤウ也浅草川スモ夕川夕ヘス
名ニナカレタレト加茂桂ヨリハ賤ニクテ肩落

ニタリ山並モアラバト願ハレ目黒ハ物フリ山
坂オモシロケレドハテニナクテ水遠ニサガニ
似テサニシカラス風情ナリ曹司谷ハ樵ノ木立
モ昔ナカラ寺モヨシ三光ナドツ子ニ又鳥ノカ
ラ声伏猪ノ床モメツラシクハアレド鶉鳴フカ
艸山ニ墨染ノ寺元政ナド聞フルヒジリ任ケン
跡忍ハレタリ遙劣レルモノ也王子ハ漲落一尾
ノ水ニ曲水ノ夕ハフシモスナル舟ニテ行カヘ
ルオシワレモカウナド茂ル菊ヲアキナヘル人
ノ閑居ニハ茶園モ処々ニテ花園モウツロフ頃

アル処二名ヲ題ニ終二名ノ出来候画様ニ隨ヒ
候故ノ一ト申候コレヨリ好事ノ人詩ヲモ題咏
ニ候キソレ以テ又八ツトニ候一ハ沈約カ八詠樓
ノ傲ヒ候共申ニ李太白金華閣八景ト申ス一旬
ニヨリ候共申候哉本邦ニテワケテ取ハヤニ候
ハ東山公方ノ御物ニ玉澗カ八景候故ト聞工候
サレトコナタノ景ヲソレニ擬ニ候事ニナリ候
ヒニハ慶長元和ノ頃ホヒ京ノ日光寺ノ長老故
有テ述江ニ蟄居ス時ニ述江ノ景ヲ瀟湘ノ八景
ノ題ヲ用ヒテ撰ニナサレ候ヲ時ノ堂上衆歌モ

候ヒシハ是述江八景ト申モノニ候夫ヨリコノ
方國郡ハ叔才キ當時大名旗本衆中ノ別業山莊
等ニ八景ノナキ分一取モナキヤウニ成来リコ
コカニコヨリ詩歌心得候者ニハソノ詩哥望マ
レ候異國ニテハ景ト名ソク候ニ十モ二十モ候
ハソニ限ルヘカラス或ハ詠ト云或ハ勝トイヒ
境トイヒ絶トイフノ如キ其名モ其数モ定マラ
ヌ一勿論ニ候然ルニ本邦ノ世俗景トシテ夜雨
秋月ナラスナク帰帆落戸ナラナク候ハ余リニ
不雅ナル一ニヤ中國ノ人ハ申ニ及ハズ朝鮮ノ

